

令和4(2022)年度

渋谷区立松濤美術館

THE SHOTO MUSEUM OF ART

年報 第26号／紀要 第1号

ANNUAL REPORT No.26／BULLETIN No.1



撮影：上野則宏

令和4(2022)年度

渋谷区立松濤美術館

THE SHOTO MUSEUM OF ART

年報 第26号／紀要 第1号

ANNUAL REPORT No.26／BULLETIN No.1

新規受贈作品 ハイライト



村田勝四郎《鵜》1936年、ブロンズ



森芳雄《無題》年代不詳、鉛筆・紙(スケッチブック)



白井晟一《戒 莫作諸惡衆善奉行》
年代不詳、紙本墨書

目 次

年報 第26号

I 施設概要	005
II 展観	007
令和4(2022)年度	007
III 展覧会カタログ・関連書籍 等	043
IV 館蔵品貸出状況	046
V 新規受贈作品	047
VI 教育普及	056
1. 講演会	056
2. 美術教室	056
3. コンサート	057
4. ギャラリートーク	057
5. 展覧会関連イベント	058
6. 建築ツアー	059
VII 入館状況	060
VIII 日記抄	061
IX 組織	062
X 利用案内	063

紀要 第1号

白井晟一と京都高等工芸学校

平泉千枝(渋谷区立松濤美術館 学芸員)	066
---------------------	-----

川添登研究の方法的課題

木原天彦(渋谷区立松濤美術館 学芸員)	074
---------------------	-----

I 施設概要

建物概要

位 置	東京都渋谷区松濤二丁目14番14号		
建物構造	鉄筋コンクリート造		
	地下2階地上2階建		
敷地面積	1,034.57㎡		
建築面積	618.40㎡		
延床面積	2,027.18㎡		
階層別面積	塔屋	29.48㎡	
	2階	461.20㎡	
	1階	305.50㎡	
	地下1階	623.95㎡	
	地下2階	607.05㎡	
建築着工	昭和53（1978）年12月21日		
竣 工	昭和55（1980）年 5月 8日		
建築工事	株式会社 竹中工務店		
設 計	白井晟一研究所		
開 館	昭和56（1981）年10月 1日		

各室面積

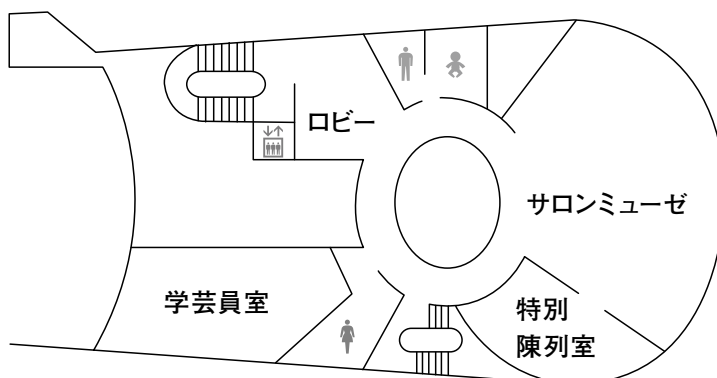
〔2階〕	特別陳列室	30.00㎡
	サロンミュージーゼ	148.00㎡
	館長室	41.00㎡
	学芸員室	43.50㎡
〔1階〕	ロッカー室	11.50㎡
	ギャラリー	35.00㎡
	事務室	58.00㎡
	ロビー	64.50㎡
〔地下1階〕	陳列室	203.00㎡
	荷解室	15.50㎡
	格納室	28.50㎡
	収蔵庫	78.50㎡
	機械室	34.50㎡
	倉庫	10.00㎡
〔地下2階〕	ホール	121.00㎡
	映写室	6.50㎡
	第一制作室	37.00㎡
	第二制作室	34.50㎡
	講師控室	18.50㎡
	機械室	94.00㎡

平面図

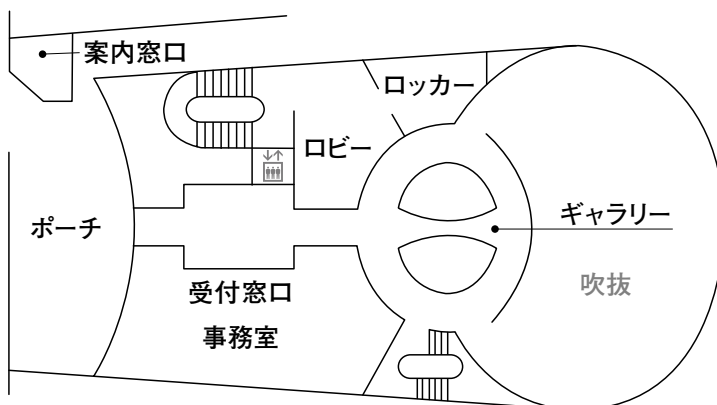
凡例



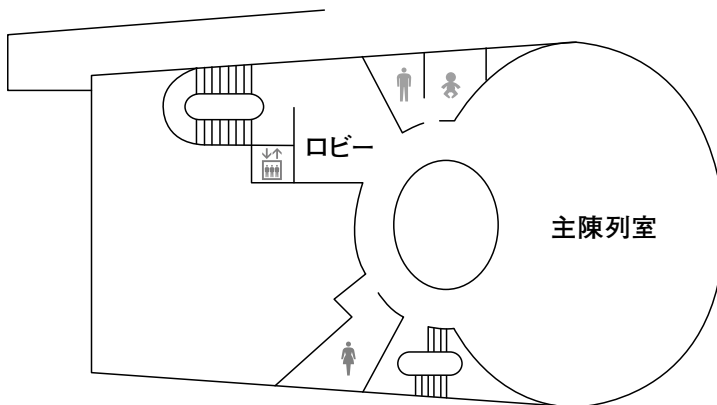
2 階



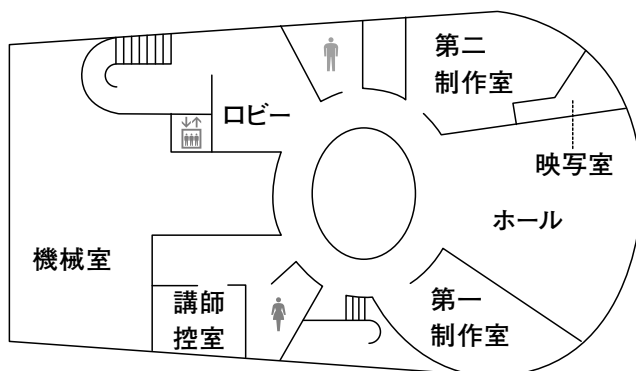
1 階



地下 1 階



地下 2 階



Ⅱ 展観

令和4(2022)年度

特別展「SHIBUYAで仏教美術－奈良国立博物館コレクションより

Buddhist Art in SHIBUYA – Masterpieces from the Nara National Museum Collection」…………… 008

特別展「津田青楓 図案と、時代と、

Tsuda Seifū – the designs, the time and…」…………… 012

特別展「装いの力－異性装の日本史

The Power of Clothing: History of Cross-Dressing in Japan」…………… 023

特別展「ビーズ –つなぐ かざる みせる 国立民族学博物館コレクション

National Museum of Ethnology Collection : Beads in the World」…………… 029

2023 松濤美術館公募展

2023 Shoto Museum of Art Exhibition of Works by the General Public …………… 038

サロン展「写真のノスタルジア / 特別陳列 関東大震災のイメージ

Salon Exhibition “Nostalgia of Photography / Special Exhibition: Images of the Great Kanto Earthquake”」…………… 039

令和4(2022)年度

特別展

SHIBUYAで仏教美術－奈良国立博物館コレクションより Buddhist Art in SHIBUYA－Masterpieces from the Nara National Museum Collection

会期＝令和4(2022)年4月9日(土)～5月29日(日)

前期：4月9日(土)～5月8日(日) 後期：5月10日(火)～29日(日)

A期間：4月9日(土)～4月24日(日) B期間：4月26日(火)～5月8日(日)

会場＝地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室

主催＝渋谷区立松濤美術館

特別協力＝奈良国立博物館

奈良国立博物館は、明治28(1895)年4月に帝国奈良博物館として開館して以来、仏教と関わりの深い古美術品や考古遺品などの保存、調査・研究、展示を通じて、優れた仏教美術の魅力とその背景にある豊かな歴史・文化を長きにわたり多くの人々に伝えてきた。

本展は同館の数多くある所蔵品の中から、仏教に関する美術工芸品、計83件を2部構成で紹介した。第1部は「日本の仏教の流れ」と題し、仏教の開祖・釈迦を表した作品から、仏教の伝播とともに発展を遂げた絵画や彫刻作品を展示。第2部「珠玉の名品たち－まほろばの国から」では、奈良国立博物館所蔵の仏像、書跡、工芸の名品を紹介した。

出陳作品の中には《辟邪絵》《牛皮華鬘》の国宝2件と、《薬師如来像》や《如意輪観音菩薩坐像》などの重要文化財15件が含まれていた。特に本展では《辟邪絵》全5幅と、飛鳥時代から南北朝時代までの仏像の逸品7尊の展示が実現し、まさに名品展というべき展覧会となった。

また、会期中の関連イベントでは、同館学芸部美術室長の岩井共二氏による記念講演会「奈良国立博物館の仏教美術コレクション」と、雅楽演奏家の笹本武志氏による演奏会「悠久の調べ～まほろばの国から」を開催。仏教文化をより深める催しとなった。

本展は新型コロナウイルス感染症流行の影響で外出がはばかれたこの時期に、東京で奈良国立博物館の至宝をまとめて展観できる好機となったほか、改めて仏教文化に対する関心を高める機会となった。



出品目録

番号	展示期間	指定	作品名	員数	品質形状	時代	寄贈者
【第1部】日本の仏教美術の流れ							
<第1章>釈迦の美術							
1	前期	重要文化財	宝篋印塔嵌装舍利厨子 附 法華経	1基	厨子:木製 黒漆塗 舍利容器:銅製鍍金 法華経:紙本墨書	鎌倉時代 嘉禄2年(1226)	
2	後期	重要文化財	首懸駄都種子曼荼羅厨子	1基	木製 黒漆塗 彩絵 金銅装	鎌倉時代 (13～14世紀)	
3	前期		釈迦如来像	1幅	絹本着色	鎌倉時代 (13世紀)	
4	前期		釈迦五尊十羅刹女像	1幅	絹本着色	鎌倉時代 (14世紀)	
5	後期		法華経曼荼羅	2幅 (7幅の内)	絹本着色	鎌倉時代 (13世紀)	
6	半期巻替		広弘明集 巻第十七(中尊寺経)	1巻	紺紙金銀交書	平安時代 (12世紀)	
<第2章>密教							
7	通期		不動明王立像	1軀	銅造	鎌倉時代 文永6年(1269)	
8	通期	重要文化財	如意輪観音菩薩坐像	1軀	木造 古色(現状)	平安時代 (9～10世紀)	
9	前期		千手観音二十八部衆像	1幅	絹本着色	鎌倉時代 (13～14世紀)	
10	後期		如意輪観音像	1幅	絹本着色	鎌倉時代 (14世紀)	
11	前期		愛染明王像	1幅	絹本着色	平安時代 (12世紀)	
12	後期		烏樞沙摩明王像	1幅	絹本着色	鎌倉時代 (14世紀)	
13	前期		不動明王二童子俱利伽羅龍剣像	1幅	紙本墨画	鎌倉時代 (13世紀)	
14	後期		帝釈天図像	1幅	紙本墨画	鎌倉時代 (13世紀)	
15	後期		両界曼荼羅	2幅	絹本着色	鎌倉時代 (13世紀)	
16	前期	重要文化財	両界曼荼羅	2幅	絹本着色	鎌倉時代 (13世紀)	
17	前期	重要文化財	俱利伽羅龍剣二童子像	1幅	絹本着色	鎌倉時代 (13世紀)	
18	前期		理趣経曼荼羅図像	1巻	紙本墨画	鎌倉時代 (13世紀)	
19	半期巻替		十巻抄(天部)	1巻	紙本着色	鎌倉時代 (13世紀)	
20	前期		香葉抄	1巻	紙本墨書	鎌倉時代 (13世紀)	
21	後期		不動護摩次第	1巻	紙本墨書	鎌倉時代 (13世紀)	
22	後期		如意輪法	1巻	紙本墨書	鎌倉時代 承元2年(1208)	
23	通期		五鈷鈴	1口	銅製 鍍金	平安時代 (12世紀)	佐藤泰三氏寄贈
24	通期		五鈷杵	1口	銅製 鍍金	平安時代 (12世紀)	細見亮市氏寄贈
25	通期		三鈷杵	1口	銅製 鍍金	平安時代 (12世紀)	服部和彦氏寄贈
26	通期		独鈷杵	1口	銅製 鍍金	鎌倉時代 (13世紀)	
27	通期		金剛盤	1基	銅製 鍍金	鎌倉時代 (14世紀)	服部和彦氏寄贈
28	通期		火舎	1合	銅製 鍍金	鎌倉時代 (14世紀)	

番号	展示期間	指定	作品名	員数	品質形状	時代	寄贈者
29	通期		華瓶	1対	銅製 鍍金	鎌倉時代 (14世紀)	
30	通期		六器	3口	銅製 鍍金	鎌倉時代 (13～14世紀)	服部和彦氏寄贈
<第3章>浄土信仰							
31	前期		阿弥陀聖衆来迎図	1幅	絹本着色	鎌倉時代 (13～14世紀)	
32	前期		阿弥陀来迎図	1幅	絹本着色	鎌倉時代(14世紀)	
33	後期		阿弥陀如来像	1幅	絹本着色	南北朝時代 建武元年(1334)	
34	後期	重要文化財	地藏菩薩像	1幅	絹本着色	鎌倉時代 (13世紀)	
35	通期		地藏菩薩立像	1軀	木造 彩色・截金	鎌倉時代 (13世紀)	
36	半期巻替	重要文化財	法華経 巻第六	1巻	彩箋墨書	平安時代 (12世紀)	
37	前期		刺繍種子阿弥陀三尊像	1幅	絹製 刺繍(一部に髪繍)	鎌倉時代 (14世紀)	
38	後期		刺繍阿弥陀三尊来迎図	1幅	絹製 刺繍(一部に髪繍)	南北朝～室町時代 (14～15世紀)	
39	前期		刺繍釈迦阿弥陀二尊像	1幅	絹製 刺繍(一部に髪繍)	鎌倉時代 (13～14世紀)	
40	後期		刺繍種子地藏菩薩像	1幅	絹製 刺繍(髪繍) 著色	南北朝～室町時代 (14～15世紀)	
<第4章>神仏習合							
41	前期		春日宮曼荼羅	1幅	絹本着色	鎌倉時代 (13～14世紀)	
42	後期		春日社寺曼荼羅	1幅	絹本着色	鎌倉時代 (13～14世紀)	
43	前期		春日地藏曼荼羅	1幅	絹本着色	室町時代 (16世紀)	
44	後期		春日文殊曼荼羅	1幅	絹本着色	鎌倉時代 (14世紀)	
45	前期		藤原鎌足像	1幅	絹本着色	安土桃山時代 (16世紀)	
46	後期		役行者像	1幅	絹本着色	室町時代 (14世紀)	
47	前期		大般若経 巻第四百二(源豪一筆経)	1巻	紙本墨書	鎌倉時代 貞応2年(1223)	
48	後期		大般若経 巻第四百十八(東大寺八幡経)	1巻	紙本墨書	鎌倉時代 (13世紀)	
<第5章>絵巻							
49	前期:3幅 後期:2幅	国宝	辟邪絵 前期:天刑星・梅檀乾闥婆・毘 沙門天 後期:鍾馗・神虫	5幅	紙本着色	平安～鎌倉時代 (12世紀)	
50	後期	重要文化財	沙門地獄草紙(沸尿地獄)	1幅	紙本着色	平安～鎌倉時代 (12世紀)	
51	前期:上巻 後期:下巻		泣不動縁起	2巻	紙本着色	室町時代 (15世紀)	
【第2部】珠玉の名品たちーまほろばの国から							
<第1章>御仏と出会うー仏像							
52	通期		観音菩薩立像	1軀	銅造	飛鳥時代 (7世紀)	
53	通期		観音菩薩立像	1軀	銅造	奈良時代 (8世紀)	
54	通期	重要文化財	薬師如来坐像	1軀	銅造	奈良時代 (8世紀)	
55	通期		毘沙門天立像	1軀	木造 彩色・截金	鎌倉時代 (13世紀)	

番号	展示期間	指定	作品名	員数	品質形状	時代	寄贈者
<第2章>うるわしの書							
56	前期		夢窓疎石墨跡 円覚経偈	2幅	紙本墨書	南北朝時代 (14世紀)	
57	後期		固山一鞏墨跡 七言	1幅	紙本墨書	南北朝時代 (14世紀)	
58	A期間	重要文化財	清拙正澄墨跡 法語	1幅	紙本墨書	鎌倉時代 嘉暦2年(1327)	
59	B期間	重要文化財	兀庵普寧墨跡 与東巖慧安尺牘	1幅	蠟箋墨書	中国・南宋時代 咸淳6年(1270)	
60	前期		明月記断簡	1幅	紙本墨書	鎌倉時代 (13世紀)	
61	前期		足利義満書状案	1幅	紙本墨書	南北朝時代 康暦2年(1382)	
62	後期		三社託宣	1幅	紙本墨書	南北朝時代 (15世紀)	
63	後期		明恵上人夢記(四月二十二日)	1幅	紙本墨書	鎌倉時代 (13世紀)	
64	後期		三宝絵断簡(東大寺切)	1幅	彩箋墨書	平安時代 保安元年(1120)	
65	A期間		中臣祐賢和歌懷紙(春日懷紙)	1幅	紙本墨書	鎌倉時代 (13世紀)	
66	B期間	重要文化財	慈円僧正懷紙	1幅	紙本墨書	鎌倉時代 (13世紀)	
67	後期	重要文化財	民部省符	1幅	紙本墨書	平安時代 延長4年(926)	
<第3章>仏教工芸の粋							
68	後期		錦幡	1旒	絹製 錦織 刺繍	鎌倉時代 (14世紀)	
69	前期	国宝	牛皮華鬘	2面	牛皮 彩色 截金	平安時代 (11世紀)	
70	後期	重要文化財	鳳凰文戩金経箱	1合	木製 黒漆塗 沈金	中国・元時代 (14世紀)	
71	前期		経帙	1枚	竹製 (縁)錦張り (金具)銅製 鍍金	平安時代 (12世紀)	
72	前期		龍頭	2点	木製、彩色 一部鉄製	鎌倉時代 (13～14世紀)	
73	後期		散蓮華蝶文螺鈿卓	1基	木製 黒漆塗 螺鈿	平安時代 (12世紀)	
74	通期		柄香炉	1柄	銅製	中国・唐時代 (9～10世紀)	
75	通期		仙蓋形水瓶	1口	銅製 鍍金	中国・唐時代 (8世紀)	
76	通期		転法輪筒	1合	木製 墨画 淡彩	平安時代 (12世紀)	
77	通期	重要文化財	四大明王五鈷鈴	1口	銅製 鍍金	中国・唐時代 (8世紀)	
78	通期		梵釈四天王五鈷鈴	1口	銅製	中国・元または朝鮮半島・高麗時代(14世紀)	
79	通期		五大明王五鈷鈴	1口	銅製 鍍金	朝鮮半島・高麗時代 (10～14世紀)	服部和彦氏寄贈
80	通期		四天王五鈷鈴	1口	銅製 金箔	中国・唐時代 (8～9世紀)	服部和彦氏寄贈
81	通期		蔵王権現鏡像	1面	銅製	平安時代 (12世紀)	
82	通期		十一面観音懸仏	1面	銅製 鍍金	平安時代 (12世紀)	
83	通期		笈	1背	木製 漆塗 金銅装	室町時代 (15世紀)	

特別展

津田青楓 図案と、時代と、 Tsuda Seifū — the designs, the time and...

会期＝令和4(2022)年6月18日(土)～8月14日(日)

前期：6月18日(土)～7月18日(月・祝) 後期：7月20日(水)～8月14日(日)

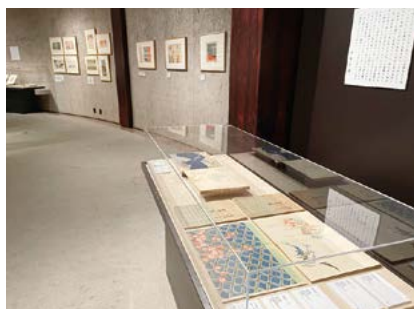
会場＝地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室

主催＝渋谷区立松濤美術館

工芸品の下絵として捉えられがちな「図案」。しかし明治から大正時代は「図案」は必ずしも何かに応用されるために描かれるのではなく、また「絵画」とも異なるものとして存在するようになった時代だった。明治時代、ヨーロッパの美術やデザインが日本でも広く知られるようになると、それまでの伝統的な図案から脱却し、独自の創意をもって考案しようという機運が高まった。職人の仕事とされていた図案制作に画家も携わるようになり、その芸術化が試みられた、いわば図案の変革期であった。本展は、明治30年代に京都で多くの図案集を出版し、大正時代には夏目漱石らの本の装幀も手がけた津田青楓(1880-1978)を軸に、図案集と図案に関する作品を紹介した。青楓は、明治13(1880)年に京都に生まれ、明治から大正、昭和時代と目まぐるしく変化する社会の中で、日本画、洋画、工芸、書など幅広い分野で活躍した作家である。

展示は2部構成とし、第1会場である2階展示室では津田青楓による図案を、第2会場の地下1階展示室では、同時代の様々な図案を紹介し、津田青楓だけでなくその時代の図案界の状況についても理解を深めることのできる展示とした。展示作品は、図案集や原画、大学の教材や卒業制作、漆工品、染織品、刺繍作品、装幀本に加え、青楓の日本画や洋画作品198点、さらに絵ハガキや日記など資料類20点を展示した。

会期中は、本展作品出品者で、明治から昭和にかけての図案を研究してきた山田俊幸氏のトークイベント、津田青楓の図案集を出版した美術書出版株式会社芸艸堂の協力による明治時代の版木を使用した摺りの実演イベント、担当学芸員による講座やギャラリートークを開催した。また、本展図録は第64回全国カタログ展で、全国中小企業団体中央会会長賞および銀賞を受賞した(編集・発行：渋谷区立松濤美術館、制作：美術書出版株式会社芸艸堂、印刷・製本：光村印刷株式会社)。



出品目録

展示期間		作品番号	作家名	作品名/ 著編者名・書名	発行者等	制作年	技法・材質	所蔵
6/18	7/20							
7/18	8/14							

第1章—青楓図案万華鏡

	1A	津田青楓(編集)	『華橋』 はなたちばな	本田雲錦堂	明治32(1899)年6月	木版、紙	芸艸堂
	1C	津田青楓(編集)	『華橋』	本田雲錦堂	明治32(1899)年6月	木版、紙	個人蔵
	2A	津田青楓	『華紋譜 花之巻』 かもんみ	本田雲錦堂	明治32(1899)年6月	木版、紙	芸艸堂
	2B	津田青楓	『華紋譜 花之巻』	本田雲錦堂	明治32(1899)年6月	木版、紙	笛吹市青楓美術館
	2C	津田青楓	『華紋譜 花之巻』	本田雲錦堂	明治32(1899)年6月	木版、紙	個人蔵
	3A	津田青楓	『華紋譜 楓之巻』	本田雲錦堂	明治33(1900)年4月	木版、紙	芸艸堂
	3B	津田青楓	『華紋譜 楓之巻』	本田雲錦堂	明治33(1900)年4月	木版、紙	笛吹市青楓美術館
	3C	津田青楓	『華紋譜 楓之巻』	本田雲錦堂	明治33(1900)年4月	木版、紙	個人蔵
	4A	津田青楓	『青もみぢ』一卷	本田雲錦堂	明治32(1899)年8月	木版、紙	個人蔵
	4B	津田青楓	『青もみぢ』一卷	本田雲錦堂	明治32(1899)年8月	木版、紙	山田俊幸氏
	5A	津田青楓	『青もみぢ』二巻	本田雲錦堂	明治32(1899)年11月	木版、紙	個人蔵
	5B	津田青楓	『青もみぢ』二巻	本田雲錦堂	明治32(1899)年11月	木版、紙	山田俊幸氏
	6A	津田青楓	『青もみぢ』三巻	本田雲錦堂	明治33(1900)年1月	木版、紙	個人蔵
	7	津田青楓	『青もみぢ』四巻	本田雲錦堂	明治33(1900)年2月	木版、紙	個人蔵
	8A	津田青楓	『青もみぢ』五巻	本田雲錦堂	明治33(1900)年6月	木版、紙	個人蔵
	8B	津田青楓	『青もみぢ』五巻	本田雲錦堂	明治33(1900)年6月	木版、紙	山田俊幸氏
	9A	津田青楓	『青もみぢ』六巻	本田雲錦堂	明治34(1901)年1月	木版、紙	個人蔵
	9B	津田青楓	『青もみぢ』六巻	本田雲錦堂	明治34(1901)年1月	木版、紙	山田俊幸氏
	10	津田青楓	『紋様小品』一卷	本田雲錦堂	明治33(1900)年8月	木版、紙	芸艸堂
	11	津田青楓	『紋様小品』二巻	本田雲錦堂	明治35(1902)年4月	木版、紙	芸艸堂
	12A	津田青楓(編集)	『図案集』一卷	本田雲錦堂	明治33(1900)年8月	木版、紙	個人蔵
	12B	津田青楓(編集)	『図案集』一卷	本田雲錦堂	明治33(1900)年8月	木版、紙	個人蔵
	13	津田青楓(編集)	『図案集』二巻	本田雲錦堂	明治33(1900)年9月	木版、紙	個人蔵
	14	津田青楓(編集)	『図案集』四巻	本田雲錦堂	明治33(1900)年12月	木版、紙	個人蔵
	15A	津田青楓	『うづら衣』二巻	山田芸艸堂	明治36(1903)年9月	木版、紙	スコット・ジョンソン氏
	15B	津田青楓	『うづら衣』	山田芸艸堂	明治36(1903)年	木版、紙	スコット・ジョンソン氏
	15C	津田青楓	『うづら衣』(合本)	山田芸艸堂	明治36(1903)年9月	木版、紙	笛吹市青楓美術館
	16A	津田青楓	『うづら衣』校正	山田芸艸堂	明治36(1903)年頃	木版、紙、墨	個人蔵
	16B	津田青楓	『うづら衣』校正	山田芸艸堂	明治36(1903)年頃	木版、紙	個人蔵
	17	津田青楓	『染織図案』一卷	山田芸艸堂	明治37(1904)年3月	木版、紙	芸艸堂
	18	津田青楓	『染織図案』二巻	山田芸艸堂	明治37(1904)年3月	木版、紙	芸艸堂
	19	津田青楓	『染織図案』三巻	山田芸艸堂	明治37(1904)年3月	木版、紙	芸艸堂
	20	津田青楓	『染織図案』四巻	山田芸艸堂	明治37(1904)年3月	木版、紙	芸艸堂
	21	津田青楓(編集)	『小美術』 第一巻第一号	山田芸艸堂	明治37(1904)年4月	木版ほか、紙	佐倉市立美術館
	22A	津田青楓(編集)	『小美術』 第一巻第二号	山田芸艸堂	明治37(1904)年5月	木版ほか、紙	佐倉市立美術館

展示期間		作品番号	作家名	作品名/ 著編者名・書名	発行者等	制作年	技法・材質	所蔵
6/18 ～ 7/18	7/20 ～ 8/14							
		23	津田青楓(編集)	『小美術』 第一巻第三号	山田芸艸堂	明治37(1904)年6月	木版ほか、紙	佐倉市立美術館
		24	津田青楓(編集)	『小美術』 第一巻第四号	山田芸艸堂	明治37(1904)年7月	木版ほか、紙	佐倉市立美術館
		25A		『小美術』 第一巻第五号	山田芸艸堂	奥付なし	木版ほか、紙	佐倉市立美術館
		26	津田青楓(編集)	『小美術』 第一巻第六号	山田芸艸堂	明治37(1904)年12月	木版ほか、紙	佐倉市立美術館
		27	津田青楓	『小美術図譜』	山田芸艸堂	明治37(1904)年9月	木版、紙	芸艸堂
		28A	津田青楓	『ナツ艸』	山田芸艸堂	明治37(1904)年9月	木版、紙	個人蔵
		29	津田青楓	『青もみぢ』 七巻、九巻(合本)	芸艸堂合名会社	明治39(1906)年 9月、11月	木版、紙	個人蔵
		30A	津田青楓、浅野古香	『落柿 上』	山田芸艸堂	奥付なし	木版、紙	芸艸堂
		30C	津田青楓、浅野古香	『落柿 上』	山田芸艸堂	奥付なし	木版、紙	個人蔵
		31A	津田青楓、浅野古香	『落柿 下』	山田芸艸堂	明治39(1906)年9月	木版、紙	芸艸堂
		31C	津田青楓、浅野古香	『落柿 下』	山田芸艸堂	明治39(1906)年9月	木版、紙	個人蔵
		32	津田青楓	図案		制作年不詳	着彩、紙	佐倉市立美術館
		33	津田青楓	図案(風景)		制作年不詳	着彩、紙	佐倉市立美術館
		34	津田青楓	図案(山と鳥)		制作年不詳	着彩、紙	佐倉市立美術館
		35	津田青楓	図案(船)		制作年不詳	着彩、紙	佐倉市立美術館
		36	津田青楓	図案		制作年不詳	着彩、紙	佐倉市立美術館
		37	津田青楓	雪中の廃車		制作年不詳	着彩、紙	佐倉市立美術館
		38	津田青楓	図案(梅)		制作年不詳	着彩、紙	佐倉市立美術館
		39	津田青楓	裾模様三種		制作年不詳	着彩、紙	佐倉市立美術館
		40	津田青楓(装幀)	森田草平『十字街』	春陽堂	大正元(1912)年 12月(初版)	書籍	新宿区立漱石山房記念館
		41	津田青楓(装幀)	夏目漱石 『鶉籠 虞美人草』(縮刷)	春陽堂	大正13(1924)年 4月(85版) (初版 大正2年12月)	書籍	新宿区立漱石山房記念館
		42	津田青楓(装幀)	夏目漱石『三四郎』 (縮刷)	春陽堂	大正7(1918)年 4月(5版) (初版 大正4年10月)	書籍	新宿区立漱石山房記念館
		43	津田青楓(装幀)	夏目漱石『それから』 (縮刷)	春陽堂	大正13(1924)年 7月(22版) (初版 大正4年3月)	書籍	山田俊幸氏
		44	津田青楓(装幀)	夏目漱石『道草』	岩波書店	大正8(1919)年 2月(13版) (初版 大正4年10月)	書籍	山田俊幸氏
		45	津田青楓(装幀)	夏目漱石『明暗』	岩波書店	大正6(1917)年 2月(6版) (初版 大正6年1月)	書籍	山田俊幸氏
		46	津田青楓(装幀)	夏目漱石『彼岸過迄』 (縮刷)	春陽堂	大正6(1917)年 (再版)(初版 同年)	書籍	笛吹市青楓美術館
		47	津田青楓	九竹草堂絵日記		大正6(1917)年	紙本墨画淡彩	笛吹市青楓美術館
		48	津田青楓(装幀)	夏目漱石『鶉籠』(縮刷)	春陽堂	大正13(1924)年 3月(25版) (初版 大正6年11月)	書籍	新宿区立漱石山房記念館
		49	津田青楓(装幀)	夏目漱石『明暗』(縮刷)	岩波書店	大正7(1918)年 9月(9版) (初版 大正7年4月)	書籍	新宿区立漱石山房記念館

展示期間		作品番号	作家名	作品名/ 著編者名・書名	発行者等	制作年	技法・材質	所蔵
6/18 ～ 7/18	7/20 ～ 8/14							
		50	津田青楓(装幀)	鈴木三重吉『櫛』	春陽堂	大正2(1913)年	書籍	笛吹市青楓美術館
		51	津田青楓(装幀)	鈴木三重吉『珊瑚樹』	植竹書院	大正3(1914)年 11月(5版) (初版 大正3年9月)	書籍	山田俊幸氏
		52	津田青楓(装幀)	鈴木三重吉 『三重吉全集』 第一編「瓦」	春陽堂	大正4(1915)年	書籍	笛吹市青楓美術館
		53	津田青楓(装幀)	鈴木三重吉 『三重吉全集』 第二編「赤い鳥」	春陽堂	大正4(1915)年	書籍	笛吹市青楓美術館
		54	津田青楓(装幀)	鈴木三重吉 『三重吉全集』 第三編「子猫」	春陽堂	大正4(1915)年	書籍	笛吹市青楓美術館
		55	津田青楓(装幀)	鈴木三重吉 『三重吉全集』 第四編「女」	春陽堂	大正4(1915)年	書籍	笛吹市青楓美術館
		56	津田青楓(装幀)	鈴木三重吉 『三重吉全集』 第五編「千鳥」	春陽堂	大正4(1915)年	書籍	笛吹市青楓美術館
		57	津田青楓(装幀)	鈴木三重吉 『三重吉全集』 第六編「霧の雨」	春陽堂	大正4(1915)年	書籍	笛吹市青楓美術館
		58	津田青楓(装幀)	鈴木三重吉 『三重吉全集』 第七編「黒血」	春陽堂	大正4(1915)年	書籍	笛吹市青楓美術館
		59	津田青楓(装幀)	鈴木三重吉 『三重吉全集』 第八編「金魚」	春陽堂	大正4(1915)年	書籍	笛吹市青楓美術館
		60	津田青楓(装幀)	鈴木三重吉 『三重吉全集』 第九編「桑の実」	春陽堂	大正5(1916)年	書籍	笛吹市青楓美術館
		61	津田青楓(装幀)	鈴木三重吉 『三重吉全集』 第十編「櫛」	春陽堂	大正5(1916)年	書籍	笛吹市青楓美術館
		62	津田青楓	装幀図案 『道草』(夏目漱石)		制作年不詳	着彩、キャン バス	山田俊幸氏
		63	津田青楓	装幀図案 『櫛』(鈴木三重吉)		大正前期	木版、紙	県立神奈川近代文学 館
		64	津田青楓	装幀図案 百合の花		大正前期	木版、布	県立神奈川近代文学 館
		65	津田青楓	装幀図案 鳥		大正前期	木版、布	県立神奈川近代文学 館
		66	津田青楓	装幀図案 あざみ・虫		大正前期	木版、紙	県立神奈川近代文学 館
		67	津田青楓	装幀図案 松葉ぼたん		大正前期	木版、紙	県立神奈川近代文学 館
		68	津田青楓	装幀図案 『瓦』(鈴木三重吉)		大正前期	木版、布	県立神奈川近代文学 館
		69	津田青楓	装幀図案 『赤い鳥』(鈴木三重吉)		大正前期	木版、布	県立神奈川近代文学 館
		70A	津田青楓	『装幀図案集』	合名会社芸艸堂	昭和4(1929)年12月	木版、紙	山田俊幸氏
		71	津田青楓	フランス刺繍 花と鳥		大正2(1913)年	刺繍、麻布	笛吹市青楓美術館
		72	津田青楓	フランス刺繍(A)		大正3(1914)年	刺繍、麻布	笛吹市青楓美術館
		73	津田青楓	フランス刺繍(B)		大正3(1914)年	刺繍、麻布	笛吹市青楓美術館

展示期間		作品番号	作家名	作品名/ 著編者名・書名	発行者等	制作年	技法・材質	所蔵
6/18 ～ 7/18	7/20 ～ 8/14							
		74	津田青楓	書架の一隅		明治44(1911)年	油彩、 キャンバス	笛吹市青楓美術館
		75	津田青楓	花鳥図		制作年不詳	油彩、 キャンバス	笛吹市青楓美術館
		76	津田青楓	椿図		大正4(1915)年	絹本着彩	笛吹市青楓美術館
		77	津田青楓	描更紗鶴図衝立		大正5(1916)年頃	描更紗	笛吹市青楓美術館
第2章―青楓と京都図案								
		78		『当世染様千代のひい なかつ』下巻		元禄7(1694)年	版本	株式会社千總
		79	西川祐信	『正徳ひいなかつ』		正徳3(1713)年	版本	株式会社千總
		80		『新雛形千歳袖』		寛政12(1800)年	版本	株式会社千總
		81	岸竹堂(下絵)	ちりめん 縮緬地波に雲龍文様型 友禅染裂		明治12(1879)年	型友禅 (摺友禅)、 手彩色	株式会社千總
		82	岸竹堂(下絵)	縮緬地萩の玉川文様型 友禅染裂		明治16(1883)年	型友禅 (摺友禅、 写友禅)、 手彩色	株式会社千總
		83	作者不詳	袂紗図案		制作年不詳	肉筆、冊子	株式会社千總
		84	今尾景年(下絵)	縮緬地几帳に鷹文様型 友禅染裂		明治24(1891)年	型友禅 (摺友禅、 写友禅)	株式会社千總
		85	今尾景年	『景年花鳥画譜』		明治24(1891)年	木版、紙	株式会社千總
		86	近藤徳太郎(編集)	『若冲画譜』三巻	合名会社芸艸堂	明治41(1908)年 (初版 明治23年)	木版、紙	芸艸堂
		87		『若冲画帖』		明治42(1909)年頃	木版、紙	芸艸堂
		88	故人俵屋宗達	『波涛』	合名会社芸艸堂	明治43(1910)	木版、紙	芸艸堂
		89	津田青楓	亀吉生家京都中京区橘 町界隈の由来		昭和48(1973)年	紙本墨画淡彩	笛吹市青楓美術館
		90	津田青楓	写本『画巧潜覧』		明治32(1899)年	墨、紙	笛吹市青楓美術館
		91	谷口香嶠	『光琳画譜』		明治24(1891)年	木版、紙	個人蔵
		92	作者不詳	絵刷(谷口香嶠図案、 西村總所蔵印)		制作年不詳	綴本、 紙本色刷	株式会社千總
		93	西村總左衛門店	裂(谷口香嶠図案)		制作年不詳	裂帖、 型友禅 (摺友禅、 写友禅)	株式会社千總
		94	京都市立美術工芸学 校内 美工会出版部 谷口香嶠監修	『古代模様』三号	合名会社芸艸堂	明治44(1911)年10月	木版、紙	芸艸堂
		95	京都市立美術工芸学 校内 美工会出版部 谷口香嶠監修	『古代模様』六号	合名会社芸艸堂	明治45(1912)年3月	木版、紙	芸艸堂
96		『美術海』巻の二(合本)	合名会社芸艸堂	昭和初期頃 (初版 明治29年)	木版、紙	芸艸堂		
97	神阪吉隆(神坂雪佳)	『別好京染 都乃面影』	田中治兵衛	明治23(1890)年	木版、紙	芸艸堂		
98	神坂雪佳	『ちく佐』	山田芸艸堂	明治36～38 (1903～ 05)年	木版、紙	芸艸堂		
99	ヴェルヌイユ、 モーリス・ピヤール	『装飾の中の動物』 (L'animal dans la decoration)		1897年	書籍	京都工芸繊維大学附 属図書館		

展示期間		作品番号	作家名	作品名/ 著編者名・書名	発行者等	制作年	技法・材質	所蔵
6/18 ～ 7/18	7/20 ～ 8/14							
		100	ミュシャ、 アルフォンス ムー レイ、 ガブリエル	『装飾資料集』 (DOCUMENTS DECORATIFS)		1902～05年頃	書籍	京都工芸繊維大学美 術工芸資料館 AN. 3775
		101	作者不詳	生徒作品(模写) グラッ セ、ウジェーヌ『植物 とその装飾への応用』 (La plante et ses applications ornamentales)		明治29(1896)年	書籍	京都工芸繊維大学附 属図書館
		102	浅井忠	クローバー・魚		制作年不詳	着彩、紙	佐倉市立美術館
		103	浅井忠(著) 都鳥英喜、渡部審也 (改訂)	『浅井自在画臨本 訂正』	金港堂書籍 株式会社	明治42(1909)年12月	書籍	京都工芸繊維大学附 属図書館
		104	宮本英男	生徒作品「人物木炭画」		明治42(1909)年	木炭、紙	京都工芸繊維大学美 術工芸資料館 AN. 3653-09
		105	那須田重雄	生徒作品「人物装飾画」		明治42(1909)年	着彩、紙	京都工芸繊維大学美 術工芸資料館 AN. 3653-10
		106	作者不詳	生徒作品「配色分解図」		明治42(1909)年頃	着彩、紙	京都工芸繊維大学美 術工芸資料館 AN. 3654-07
		107	作者不詳	生徒作品「MEASURED DRAWING OF TSUDSUMI (JAPANESE HAND DRUM)」		明治42(1909)年頃	着彩、紙	京都工芸繊維大学美 術工芸資料館 AN. 3656
		108	宮本英男	陶器花瓶図案 (京都高等工芸学校図 案科在学時作品)		明治41(1908)年	着彩、紙	京都工芸繊維大学美 術工芸資料館 AN. 3658-07
		109	古谷紅麟	『精英』三巻「銀世界」		明治37(1904)年1月	木版、紙	京都工芸繊維大学附 属図書館
		110	秦テルヲ	藤花蒲公英応用卓被図 案 (美工図案科卒業作品)		明治37(1904)年	紙本着彩	京都市立芸術大学芸 術資料館
		111	耕山こう	陶器模様図案 (正倉院御物瓷器式)		明治時代	着彩、紙	京都市立芸術大学芸 術資料館
		112	奥村作治郎	織物模様図案 (画題 牽牛花)		明治時代	着彩、紙	京都市立芸術大学芸 術資料館
		6B	津田青楓	『青もみち』三巻	本田雲錦堂	明治33(1900)年1月	木版、紙	山田俊幸氏
		113	浅井忠	黙語会編『木魚遺響』	山田芸艸堂	明治42(1909)年9月	書籍	山田俊幸氏
		28B	津田青楓	『ナツ艸』	山田芸艸堂	明治37(1904)年9月	木版、紙	京都工芸繊維大学附 属図書館
		114	古谷紅麟	『伊達模様花つくし』	山田芸艸堂	明治38(1905)年8月	木版、紙	芸艸堂
		22B	津田青楓(編集)	『小美術』 第一巻第二号	山田芸艸堂	明治37(1904)年5月	木版ほか、 紙	個人蔵
		25B	津田青楓(編集)	『小美術』 第一巻第五号	山田芸艸堂	奥付なし	木版ほか、 紙	個人蔵
		27	津田青楓	『小美術図譜』	山田芸艸堂	明治37(1904)年9月	木版、紙	芸艸堂
		30B	津田青楓 浅野古香	『落柿 上』	山田芸艸堂	明治39(1906)年	木版、紙	笛吹市青楓美術館
		115	作者不詳	図案		制作年不詳	着彩、紙	佐倉市立美術館
		116	作者不詳	図案		制作年不詳	着彩、紙	佐倉市立美術館

展示期間		作品番号	作家名	作品名/ 著編者名・書名	発行者等	制作年	技法・材質	所蔵
6/18 ～ 7/18	7/20 ～ 8/14							
		117	作者不詳	図案(山影)		制作年不詳	着彩、紙	佐倉市立美術館
		118	作者不詳	図案(風景)		制作年不詳	着彩、紙	佐倉市立美術館
		119	藤島武二(装幀)	与謝野品子『小扇』	金尾文淵堂	明治37(1904)年1月	書籍	日本近代文学館
		120	浅野古香	『匂い』(刷本)		明治36(1903)年	木版、紙	個人蔵
		121	浅野古香	『匂い』(刷本)		明治36(1903)年	木版、紙	個人蔵
		122	浅野古香	『匂い』(刷本)		明治36(1903)年	木版、紙	個人蔵
		123	杉林古香	しだ 羊歯模様盆		制作年不詳	漆器	佐倉市立美術館
		31B	津田青楓 浅野古香	『落柿 下』	山田芸艸堂	明治39(1906)年	木版、紙	笛吹市青楓美術館
		124	浅井忠(図案) 杉林古香(制作)	とりあわせまき えすずりばこ 鶏合 蒔絵 硯箱		明治39(1906)年	漆工	佐倉市立美術館
		125	浅井忠	図案「鶏合」		明治39(1906)年	着彩、紙	佐倉市立美術館
		126	浅井忠(図案) 杉林古香(写)	鶏合蒔絵硯箱 おきめ 置目		明治39(1906)年	墨、紙	佐倉市立美術館
		127	浅井忠(図案) 杉林古香(制作)	遊魚菓子器		明治42(1909)年	漆工	佐倉市立美術館
		128	作者不詳	「遊魚菓子器」置目		制作年不詳	墨・鉛筆、紙	佐倉市立美術館
		129	浅井忠(図案) 杉林古香(制作)	猫模様吸物碗		制作年不詳	漆工	佐倉市立美術館
		130	浅井忠	図案「けし・猫」		制作年不詳	着彩、紙	佐倉市立美術館
		131	作者不詳	「猫文吸物碗」置目		制作年不詳	墨、紙	佐倉市立美術館
		132	浅井忠(図案)	エジプト文湯呑		制作年不詳	陶器	佐倉市立美術館
		133	杉林古香	エジプト紋		制作年不詳	水彩、紙	佐倉市立美術館
		134	浅井忠	鹿模様湯呑		明治40(1907)年頃	陶器	京都国立近代美術館
		135	浅井忠(図案) 杉林古香(制作)	大津絵銘々皿		明治後期	漆、蒔絵	京都国立近代美術館
		136	黙語会(編集)	『黙語圖案集』	合名会社芸艸堂	昭和3(1928)年 10月(4版) (初版 明治42年1月)	書籍	芸艸堂
		137		『精英』二号	山田芸艸堂	明治36(1903)年7月	木版、紙	個人蔵
		138		『競華』	山田芸艸堂	明治37(1904)年4月	木版、紙	芸艸堂
		139		『とうか会』	合名会社芸艸堂	明治40(1907)年9月	木版、紙	スコット・ジョンソン氏
		140	神坂雪佳	こつげい『滑稽図案』	山田芸艸堂	明治36(1903)年4月	木版、紙	芸艸堂
		141	神坂雪佳	『染織図案 海路』 かいろう	山田芸艸堂	明治36(1903)年6月	木版、紙	芸艸堂
		142	神坂雪佳	『蝶千種』一卷	山田直三郎 (芸艸堂)	明治37(1904)年5月	木版、紙	芸艸堂
		143	神坂雪佳	『もも ぐさ 百々世草』	芸艸堂	明治42～43 (1909～10)年	木版、紙	芸艸堂
		144	古谷紅麟	『松づくし』	山田芸艸堂	明治38(1905)年8月	木版、紙	芸艸堂
		145	古谷紅麟	『竹づくし』	合名会社芸艸堂	明治39(1906)年1月	木版、紙	芸艸堂

展示期間		作品番号	作家名	作品名/ 著編者名・書名	発行者等	制作年	技法・材質	所蔵
6/18 ～ 7/18	7/20 ～ 8/14							
		146	古谷紅麟	『梅づくし』	合名会社芸艸堂	明治39(1906)年1月	木版、紙	芸艸堂
		147	古谷紅麟	『はな筏 ^{いかだ} 』	合名会社芸艸堂	明治39(1906)年3月	木版、紙	芸艸堂
		148	古谷紅麟	『写生 ^{そうか} 艸花模様』上巻	合名会社芸艸堂	明治40(1907)年1月	木版、紙	芸艸堂
		149	下村玉廣	『しき錦』	本田雲錦堂	明治36(1903)年5月	木版、紙	鬼灯書房
		150	下村玉廣	『元禄風流明治振』下巻	合名会社芸艸堂	明治38(1905)年	木版、紙	芸艸堂
		151	荻野一水	『応用漫画』	山田芸艸堂	明治36(1903)年12月	木版、紙	芸艸堂
		152	荻野一水	『かきまみくさ』下巻	本田雲錦堂	明治37(1904)年8月	木版、紙	芸艸堂
		153	小林玉年	『芽来 ^{めくるつき} 流都気』	本田雲錦堂	明治37(1904)年2月	木版、紙	芸艸堂
		154	水田静広	『水の流』	本田雲錦堂	明治37(1904)年10月	木版、紙	芸艸堂
		155	西田雲岨	『雲のかけ』	山田芸艸堂	明治38(1905)年5月	木版、紙	芸艸堂
		156		懸賞募集図案帖 「夏模様」		明治31(1898)年2月	肉筆、冊子	株式会社千總
		157		懸賞募集図案帖 「春模様」		明治31(1898)年11月	肉筆、冊子	株式会社千總
		158		『美術海』巻の拾(合本)	合名会社芸艸堂	昭和初期 (初版 明治33年)	木版、紙	芸艸堂
		159	津田青楓	暮れゆく橋		明治43(1910)年	油彩、 キャンバス	京都国立近代美術館
		160A	津田青楓(編集)	仏蘭西土産	芸艸堂	明治43(1910)年		練馬区立美術館
		160B	津田青楓(編集)	仏蘭西土産	芸艸堂	明治43(1910)年		個人蔵
○資料								
		資料 1	京都市立美術工芸学校	参考品購入精算書 (神阪吉隆)		明治36(1903)年		京都市立芸術大学芸術資料館
		資料 2	谷口香嶺	書籍費及参考品費精算書		明治32～ 40 (1899～ 1907)年		京都市立芸術大学芸術資料館
		資料 3	津田青楓	浅野古香宛絵葉書 消印 明治36(1903)年 5月31日		明治36(1903)年		佐倉市立美術館
		資料 4	津田青楓	浅野古香宛絵葉書 消印 明治38(1905)年か		明治38(1905)年？		佐倉市立美術館
		資料 5	津田青楓	浅野古香宛絵葉書 消印 明治38(1905)年か		明治38(1905)年？		佐倉市立美術館
		資料 6	津田青楓	浅野古香宛絵葉書 消印 明治38(1905)年 6月12日 京橋 6月21日軍事郵便		明治38(1905)年		佐倉市立美術館
		資料 7	津田青楓	浅野古香宛絵葉書 消印 明治38(1905)年 6月28日 京橋 7月6日軍事郵便		明治38(1905)年		佐倉市立美術館
		資料 8	浅野長次郎(古香)	津田青楓宛絵葉書 消印不明		8月15日		笛吹市青楓美術館
		資料 9	津田青楓	浅野古香宛絵葉書 消印不明、 スタンプの日付 明治39(1906)年 7月7日		明治39(1906)年		佐倉市立美術館

展示期間		作品番号	作家名	作品名/ 著編者名・書名	発行者等	制作年	技法・材質	所蔵
6/18 ～ 7/18	7/20 ～ 8/14							
		資料10	津田青楓	浅野古香宛絵葉書 消印不明		日付不明		佐倉市立美術館
		資料11	津田青楓	杉林古香宛絵葉書 消印 明治40(1907)年 4月7日		明治40(1907)年		佐倉市立美術館
		資料12	津田青楓	杉林長次郎(古香)宛絵 葉書 消印 京都 1907(明治40)年 10月8日		明治40(1907)年		佐倉市立美術館
		資料13	津田青楓・安井曾太 郎	西川一草亭宛絵葉書 消印 SEVRES 明治41(1908)年 4月20日		明治41(1908)年		笛吹市青楓美術館
		資料14	津田青楓	杉林古香宛絵葉書 消印 明治41(1908)年 か?		明治41(1908)年		佐倉市立美術館
		資料15	津田青楓	杉林古香宛絵葉書 消印 京都 明治41(1908)年 6月17日		明治41(1908)年		佐倉市立美術館
		資料16	津田青楓	杉林古香宛絵葉書 消印 神戸 明治41(1908)年 12月24日		明治41(1908)年		佐倉市立美術館
		資料17	津田青楓	杉林古香宛絵葉書 消印 京都 明治42(1909)年 6月14日		明治42(1909)年		佐倉市立美術館
		資料18	津田青楓・安井曾太 郎	杉林古香宛絵葉書 消印 京都 明治42(1909)年 10月6日		明治42(1909)年		佐倉市立美術館

第3章—青楓と新しい試み

		161	津田青楓(挿絵)	高濱清(虚子)『さしゑ』	光華堂	明治44(1911)年7月	書籍	新宿区立漱石山房記念館
		162	津田青楓(表紙)	渡邊元編『ル・イブウ』	木兎社	大正2(1913)年2月	書籍	日本近代文学館
		163	安堵久左(富本憲吉) (表紙)	村田實編『とりで』 第二号	とりで社	大正2(1913)年1月	書籍	山田俊幸氏
		164	富本憲吉(表紙)	西村辰五郎編『番紅花』 第一巻第六	東雲堂書店	大正3(1914)年8月	書籍	山田俊幸氏
		165	岸田劉生(装幀)	武者小路実篤 『人間の生活』	叢文閣	大正9(1920)年3月	書籍	山田俊幸氏
		166	岸田劉生(表紙)	齋藤清次郎編『白樺』 第一一年第四号	白樺社	大正9(1920)年4月	書籍	山田俊幸氏
		167	津田青楓	装幀かつ見本摺張込		制作年不詳	張込帳	個人蔵
		168	津田青楓	図案 青楓図案社書簡箋	合名会社芸艸堂	大正前期	鉛筆・水彩、 絹	県立神奈川近代文学 館
		169	津田青楓(絵)	絵葉書(青楓図案社)		大正9(1920)年 9月23日消印	絵葉書	個人蔵
		171	津田青楓	刺繍壁掛け		大正2(1913)年	刺繍・麻布	京都国立近代美術館
		172	富本憲吉	木と花模様刺繍壁掛け		大正2～3 (1913～14)年	刺繍・麻布	京都国立近代美術館
		173	富本憲吉	モスク模様刺繍壁掛け		大正2～3 (1913～14)年	刺繍・麻布	京都国立近代美術館

展示期間		作品番号	作家名	作品名/ 著編者名・書名	発行者等	制作年	技法・材質	所蔵
6/18 ～ 7/18	7/20 ～ 8/14							
		174	藤井達吉	草花文毛糸刺繍		大正5～12 (1916～23)年	刺繍・麻布	京都国立近代美術館
		175	藤井達吉	半衿		大正時代	刺繍・絹	京都国立近代美術館
		176	藤井達吉	半衿		大正時代	刺繍・絹	京都国立近代美術館
		177	富本憲吉(装幀)	木下空太郎 『和泉屋染物店』	東雲堂書店	明治45(1912)年	書籍	県立神奈川近代文学館
		178	津田青楓(装幀)	野上白川(野上豊一郎) 訳『邦訳近代文学』	尚文堂書店	大正2(1913)年3月	書籍	山田俊幸氏
		179	津田青楓(装幀)	夏目漱石 『金剛草』	至誠堂	大正4(1915)年 12月(3版) (初版 大正4年11月)	書籍	県立神奈川近代文学館
		1B	津田青楓(編集)	『華橘』	本田雲錦堂	明治32(1899)年6月	木版・紙	京都工芸繊維大学附属図書館
		180	津田青楓(装幀)	夏目漱石 『社会と自分』(縮刷)	実業之日本社	大正4(1915)年 11月(初版)	書籍	新宿区立漱石山房記念館
		181	津田青楓(装幀)	夏目漱石 『社会と自分』(縮刷)	実業之日本社	大正9(1920)年 2月(19版)	書籍	新宿区立漱石山房記念館
		182	津田青楓(装幀)	夏目漱石 『社会と自分』(縮刷)	実業之日本社	大正12(1923)年 1月(26版)	書籍	新宿区立漱石山房記念館
		183	津田青楓(装幀)	夏目漱石 『草合』(縮刷)	春陽堂	大正12(1923)年 5月(25版) (初版 大正6年4月)	書籍	山田俊幸氏
		184	津田青楓(装幀)	夏目漱石 『草合』	春陽堂	明治41(1908)年	書籍	山田俊幸氏
		185	津田青楓(装幀)	夏目漱石 『漾虚集』	大倉書店	大正7(1918)年 8月(4版) (初版 大正6年10月)	書籍	山田俊幸氏
		186	橋口五葉(装幀、扉) 中村不折(表紙文字)	夏目漱石 『漾虚集』	大倉書店・服部書店	明治39(1906)年5月	書籍	個人蔵
		187A	津田青楓(装幀)	夏目漱石 『行人』(縮刷)	大倉書店	大正13(1924)年 (25版) (初版 大正5年5月)	書籍	笛吹市青楓美術館
		187B	津田青楓(装幀)	夏目漱石 『行人』(縮刷)	大倉書店	大正6(1917)年 12月(8版) (初版 大正5年5月)	書籍	山田俊幸氏
		188	橋口五葉(装幀)	夏目漱石 『行人』	大倉書店	大正3(1914)年	書籍	県立神奈川近代文学館寄託
		189	津田青楓	表紙原画『心之園』 (田山花袋)		大正9(1920)年	着色、絹	個人蔵
		190	津田青楓(装幀)	田山花袋『心之園』	春陽堂	大正10(1921)年1月	書籍	日本近代文学館
		191	津田青楓(装幀)	田山花袋『二つ乃生』	春陽堂	大正9(1920)年 11月(再版) (初版 同年同月)	書籍	山田俊幸氏
		192	富本憲吉(表紙)	田中喜作編『卓上』	田中屋	大正3(1914)年4月	書籍	山田俊幸氏
		193	富本憲吉	『富本憲吉模様集 第一号』	田中屋	大正4(1915)年1月	木版・紙	山田俊幸氏
		194	藤井達吉(表紙) 岸田劉生(口絵)	山本牛介編『藝美』 第一年第一号	三笠美術店	大正3(1914)年5月	書籍	山田俊幸氏
		195	富本憲吉(表紙)	三好米吉編 『美術と文藝』 第二〇号図案の巻	柳屋画廊	大正11(1922)年5月	書籍	山田俊幸氏

展示期間		作品番号	作家名	作品名/ 著編者名・書名	発行者等	制作年	技法・材質	所蔵
6/18 ～ 7/18	7/20 ～ 8/14							
		196	富本憲吉(表紙) 竹久夢二(裏表紙)	三好米吉編『柳屋』 第二号宣伝の巻	柳屋画廊	大正11(1922)年12月	書籍	山田俊幸氏

○資料

		資料19		献品目録(晩香廬) ※重要文化財附		大正5(1916)年		渋沢史料館
		資料20	津田青楓	老松町日記 (1913～14年の日記の 書写)		昭和36(1961)年頃		笛吹市青楓美術館

- ・作品番号のA・B・Cは、同一書名の作品を個体ごとに区別するために付した
- ・浅野古香は、明治40(1907)年に杉林家に養子に入り、以降、杉林姓を名乗って制作した。本展では基本的に所蔵者の提供データを記載した

特別展

装いの力ー異性装の日本史

The Power of Clothing: History of Cross-Dressing in Japan

会期＝令和4(2022)年9月3日(土)～10月30日(日)

前期:9月3日(土)～10月2日(日)

後期:10月4日(火)～10月30日(日)

A期:9月3日(土)～9月19日(月・祝)

B期:9月21日(水)～10月2日(日)

C期:10月4日(火)～10月16日(日)

D期:10月18日(火)～10月30日(日)

会場＝地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室

主催＝渋谷区立松濤美術館

異性装とは、社会的・文化的な性別を区分するための記号である衣服をもって、出生時に生物学的に与えられた性とは異なる性となる営みである。異性装を实践した人物の性自認や性的指向は非常に多様なものであり、それらが異性装とともに必ずしも変化するという事はない。また、異性装にかかわる背景、理由、影響などの諸要素は多様なもので、決して一義的に定義できるものではない。これらを踏まえたうえで、本展は絵画、衣裳、写真、映像、漫画など141件の作品を通して、日本における異性装の歴史や受容、変化の一端を辿ることを目的としたものであった。

第1会場では、古代から近世における異性装の例を紹介した。ヤマトタケルをはじめとする異性装をしたことが伝わる神話や歴史上の人物たちのほか、異性装の登場人物が活躍する物語、そして能や歌舞伎など異性装の風俗・嗜好を反映した芸能を表した作品が展示された。

第2会場では、近代から現代の異性装の例や、異性装を主題とした作品等によって構成された。文明開化の名のもとに西洋化が推し進められた近代日本社会において、一時期、異性装は罰則の対象となるなど変化が起きる。しかし、このような抑圧の中でも力強く生きた異性装者や、近代以降も変わることがなかった異性装の芸能への嗜好を示す資料などを展示した。その他には、森村泰昌の〈女優シリーズ〉やダムタイプの《S/N》記録映像、そしてドラッグクイーンによるエンターテインメントダンスパーティー“DIAMONDS ARE FOREVER”メンバーによる、本展のためのインスタレーションが展開された。

また本展開催に際し、研究者による記念講演会や、トークイベント、ダムタイプ《S/N》パフォーマンスの全編記録映像、「女装メイク講座」のワークショップなど各種関連イベントを実施した。



出品目録

◎重要文化財 ○重要美術品 ☆彦根市指定文化財

展示 期間	no.	作者	作品名	時代	員数・材質・形状	所蔵者
1章 日本のいにしへの異性装						
	1		古事記 巻中	寛永21(1644)年刊	3冊のうち1冊 紙本墨書	国文学研究資料館
	2		日本書紀 巻七	寛文9(1669)年刊	15冊のうち1冊 紙本墨書	国文学研究資料館
前期	3	月岡芳年	月百姿 賊巢の月 小碓皇子	明治時代前期(19世紀)	画帖 1冊のうち 1枚大判錦絵	東京都江戸東京博物館
	4	三代・山川永徳 斎	日本武尊	昭和時代初期(20世紀)	1体 木・布帛・紙・ 胡粉・金属・ガラス 衣裳着人形	個人蔵
	5		とりかへばや物語	江戸時代 (18世紀)写	7冊のうち2冊 紙本墨書	東京国立博物館
前後期 場面替	6		新蔵人物語絵巻	室町時代(16世紀)	1巻 紙本墨画	サントリー美術館
後期	7		玉水物語	江戸時代 (17～19世紀)	1冊 紙本着色	京都大学附属図書館
後期	8	勝川春草(画)	錦百人一首あづま織	安永4(1775)年	1冊 紙本彩色摺	国文学研究資料館
	9	西川祐信(画)	百人女郎品定	享保8(1723)年刊	1冊 紙本墨摺	東京国立博物館
前期	10	藤原房武	寛政遷幸之巻図 巻下	寛政4(1792)年	2巻のうち1巻 紙本着色	京都大学附属図書館
前後期 場面替	11	谷文晁(摸)	石山寺縁起 巻三	江戸時代 (19世紀)	7巻のうち1巻 紙本着色	サントリー美術館
前期	12		能写生図巻「巴」	大正2(1913)年	1巻 紙本墨画淡彩	国立能楽堂
後期	13	狩野柳雪	能之図 巻上「葵上」	江戸時代後期 (18～19世紀)	2巻のうち1巻 紙本着色	国立能楽堂
後期	14		観世流十番綴浅葱色表紙謡本	江戸時代 (18～19世紀)	1式 紙本墨書	国立能楽堂
前期	15		能「巴」装束・面 15-1 能面 孫次郎 15-2 梨打烏帽子 15-3 紅地宝相華唐草模様髪帯 15-4 唐織 紅地花入七宝繫模 様唐織 15-5 摺箔 白地露芝模様摺箔 (半着) 15-6 大口 緋大口 15-7 腰帶 紅地水仙模様腰帶 15-8 太刀 15-9 長刀		1組	国立能楽堂
後期	16		能「葵上」装束・能面 16-1 能面 泥眼・般若 16-2 紅地胴箔鱗模様髪帯 16-3 唐織 紅白段四季草花塩 釜模様唐織 16-4 摺箔 白地鱗模様摺箔(半 着) 16-5 縫箔 黒地紋尽模様縫箔 16-6 中啓 赤地一輪牡丹図鬼 扇 16-7 打杖 赤		1組	国立能楽堂
2章 戦う女性一女武者						
B	17	安達吟光	大日本史略図会 日本武尊 神功皇后 三 四	明治18(1885)年 12月8日	1枚 大判錦絵	早稲田大学坪内博士記念 演劇博物館
C	18	歌川国貞(三代 豊国)	国尽倭名誉 四十八 備後 神功皇后	江戸時代(19世紀)	1枚 中判錦絵	早稲田大学坪内博士記念 演劇博物館
D	19	歌川国芳	神功皇后 坂東三津五郎 大切 所作事 武内宿祢 中村芝翫	江戸時代(19世紀)	1枚 大判錦絵	早稲田大学坪内博士記念 演劇博物館
	20		武者人形・神功皇后	江戸時代中・後期 (18～19世紀)	1組 木・布帛・紙・ 胡粉・金属/衣裳着人形	吉徳資料室
後期	21	法橋関月	巴御前出陣図	江戸時代(18世紀)	1幅 絹本着色	東京国立博物館
	22		奈良絵本 平家物語 第17冊 「木曾の最期の事」	江戸時代(18世紀)	24冊のうち1冊 紙本着色	神奈川県立歴史博物館
前期	23	一川芳員(歌川 芳員)	武勇組討尽	文久2(1862)年	1枚 大判錦絵	国立劇場

展示期間	no.	作者	作品名	時代	員数・材質・形状	所蔵者
後期	24	豊原国周	老樹曠紅葉直垂	明治18(1885)年10月	大判錦絵3枚続	国立劇場
	25	狩野洞雲益信	堀川夜討絵巻 巻下	江戸時代(17世紀)	2巻のうち1巻 紙本着色	神奈川県立歴史博物館
後期	26	豊原国周	船弁慶	明治18(1885)年10月	大判錦絵3枚続	国立劇場
前期	27	長谷川雪旦	白拍子図	江戸時代(19世紀)	1幅 紙本銀地着色	東京国立博物館
C	28	豊原国周	山吹御前 中村福助 更科姫 尾上菊五郎 静御前 助高屋 高助 巴御前 市川団十郎 は んがく女 中村芝翫 見立 名 婦六勇撰 大井子 市川左団次	明治17(1884)年2月	大判錦絵3枚続	早稲田大学坪内博士記念 演劇博物館
D	29	楊洲周延	板額女 嵐璃寛 八重垣姫 助高屋高助	明治14(1881)年	大判錦絵3枚続	早稲田大学坪内博士記念 演劇博物館
前期	30	香朝楼 (三代国貞)	和田合戦女舞鶴	明治30(1897)年4月	大判錦絵3枚続	国立劇場
前期	☆ 31		朱漆塗色々威腹巻	江戸時代(19世紀)	1領 絵草 鉄板部分:朱漆塗 威糸:多色染め絹糸	彦根城博物館
3章 “美しい”男性—若衆						
後期	32	西川祐信	美人観菊図	江戸時代 (18世紀前半)	1幅 絹本着色	氏家浮世絵コレクション
前期	33	葛飾北斎	若衆文案図	天保11(1840)年	1幅 絹本着色	氏家浮世絵コレクション
後期	34	菱川師宣 落款	美人若衆図	元禄期 (1688~1704)頃	1幅 絹本着色	静嘉堂文庫美術館
後期	◎ 35		白縮緬地衝立梅樹鷹模様 振袖	江戸時代(18世紀)	1領 縮緬(絹)、 友禅染・刺繍	東京国立博物館
前期	36		納戸紗綾地菖蒲桔梗松文 振袖	江戸時代(18世紀)	1領 紗綾、友禅染	奈良県立美術館
前期	37	滝沢馬琴	兎園小説(余禄)	文政8(1825)年以降	1冊 紙本墨書	天理大学附属天理図書館
4章 江戸の異性装—歌舞伎						
前期	○ 38		阿国歌舞伎草紙 第二段	桃山時代(17世紀初頭)	1巻 紙本着色	大和文華館
後期	39		女歌舞伎図屏風	桃山~江戸時代 (17世紀初頭)	6曲1隻 紙本着色	早稲田大学坪内博士記念 演劇博物館
後期	40	西川祐尹	男舞図	江戸時代(18世紀)	1幅 絹本着色	東京国立博物館
A B期 隻入替	41		歌舞伎等舞台図屏風	江戸時代 (18世紀後半頃)	6曲1双 紙本着色	早稲田大学坪内博士記念 演劇博物館
前期	42	木笛庵瘦牛	雨夜三盃機嫌 三巻	元禄6(1693)年	1冊 紙本墨摺	京都大学附属図書館
後期	43	月岡芳年	つき百姿 水木辰の助	明治24(1891)年	1枚 大判錦絵	東京都江戸東京博物館
C	44	勝川春紅	法花四季台	文化2(1805)年	1枚 大判錦絵	国立劇場
D	45	歌川国貞 (三代豊国)	瀬川家系譜 かつらきむけん 元祖 瀬川菊之丞 出雲の阿 国 元祖弟 瀬川菊次郎 俳名仙 魚 執着獅子 二代目 瀬川菊 之丞 王子路考	文久3(1863)年	1枚 大判錦絵	早稲田大学坪内博士記念 演劇博物館
前期	46	歌川豊国(初代)	恵方曾我萬吉原	文政2(1819)年	大判錦絵3枚続	国立劇場
後期	47	豊原国周	川中島勝利山本	慶応2(1866)年1月	大判錦絵3枚続	国立劇場
A	48	歌川国貞 (三代豊国)	女伊達あら浪のおたつ 岩井条 三郎	文政11(1828)年	1枚 大判錦絵	早稲田大学坪内博士記念 演劇博物館
B	49	歌川豊国(初代)	女伊達雷おつる 岩井条三郎 浦しま太郎作 尾上菊五郎 名古屋にて大あたり／＼	文政元(1818)年	1枚 大判錦絵	早稲田大学坪内博士記念 演劇博物館
後期	50	豊原国周	流行束髪くらべ	明治18(1885)年	1枚 大判錦絵	国立劇場
B	51	梅堂豊斎 (三代国貞)	朝日影三組杯觴	明治22(1889)年	大判錦絵3枚続	早稲田大学坪内博士記念演劇 博物館
5章 江戸の異性装—物語の登場人物・祭礼						
前期	52	歌川国綱 (二代国輝)	青砥稿花紅彩画	文久2(1862)年	大判錦絵2枚続	国立劇場
後期	53	歌川国貞 (三代豊国)	青砥稿花紅彩画	文久2(1862)年	大判錦絵3枚続	国立劇場
A	54	歌川芳艶	弁天小僧菊の助 市村羽左衛門 坂東三八 坂東又太郎 松本 国五郎 嵐吉六 日本駄右衛門 関三十郎	文久2(1862)年	大判錦絵2枚続	早稲田大学坪内博士記念 演劇博物館
前期	55	歌川国貞 (三代豊国)	三人吉三郎初買	安政7(1860)年	大判錦絵3枚続	国立劇場
後期	56	歌川国貞 (三代豊国)	初樽噺高嶋	万延元(1860)年	大判錦絵2枚続	国立劇場

展示 期間	no.	作者	作品名	時代	員数・材質・形状	所蔵者
B	57	歌川国貞 (三代豊国)	おぼう吉三 おぜう吉三 おしやう吉三	安政7(1860)年	大判錦絵3枚続	早稲田大学坪内博士記念 演劇博物館
後期	58	歌川国貞 (三代豊国)	楽屋十二支之内	万延元(1860)年	1枚 大判錦絵	国立劇場
後期	59	豊原国周	里見八犬士之内 犬坂毛野	慶応元(1865)年	1枚 大判錦絵	国立劇場
前期	60	一養亭芳瀧	里見八犬傳	明治7(1874)年10月	大判錦絵2枚続	国立劇場
前期	61	落合芳幾	甲子曾我大國柱	元治元(1864)年	大判錦絵3枚続	国立劇場
前期	62	一養亭芳瀧	四季模様白縫譚	明治7(1874)年	大判錦絵2枚続	国立劇場
D	63	歌川豊国 (三代豊国)	花の村千草 実ハ秋作 中村芝 翫 白縫大尽 実ハ若菜姫 沢村 田之助 鷲津ノ下部只七 鶴助 改 市川小文次	文久4(1864)年	大判錦絵3枚続	早稲田大学坪内博士記念 演劇博物館
C	64	歌川豊国 (三代豊国)	花の村千種 実ハ秋作 乳母秋 篠の霊 荒瀬弥藤太 白ぬひ 大尽 実ハ若菜姫	嘉永6(1853)年	大判錦絵2枚続	早稲田大学坪内博士記念 演劇博物館
B	65	歌川豊国 (三代豊国)	児雷也豪傑譚	嘉永5(1852)年8月	大判錦絵2枚続	早稲田大学坪内博士記念 演劇博物館
C	66	落合芳幾	今様擬源氏 三十八 鈴むし 宝子実ハ児雷也	元治元(1864)年	1枚 大判錦絵	早稲田大学坪内博士記念 演劇博物館
D	67	豊原国周	市川團十郎演芸百番 宝子実ハ児雷也	明治時代(19世紀)	1枚 大判錦絵	早稲田大学坪内博士記念 演劇博物館
前期	68	鈴木春信	美人三番叟	宝暦年間(1751-64)	1枚 細判縦	神奈川県立歴史博物館
前期	69	豊原国周	新吉原俄獅子之図	明治5(1872)年	大判錦絵3枚続	国立劇場
後期	70	月岡芳年	風俗三十二相 にあいさう 弘化年間廓の芸者風俗	明治21(1888)年4月	大判錦絵	東京都江戸東京博物館
	71	落合芳幾	新吉原角街稲本楼ヨリ 仲之街仁和賀一覽之圖	明治2(1869)年	大判錦絵3枚続	国立音楽大学附属図書館 竹内道敬文庫
	72	月岡耕漁	都之錦 にわか	明治33-34(1900-01)年	1枚 大判錦絵	国立音楽大学附属図書館 竹内道敬文庫
	73	喜多川歌麿	青楼仁和嘉 浅妻船	寛政3-享和4 (1791-1804)年	1枚 間判錦絵	国立音楽大学附属図書館 竹内道敬文庫
	74	喜多川秀麿	青楼仁和嘉 助六所縁の江戸 桜	文化9(1812)年9月	1枚 間判錦絵	国立音楽大学附属図書館 竹内道敬文庫
	75	歌川豊清	新吉原仁和歌 女作浪花湊 つるや のふ	文化9-文政3 (1812-20)年	1枚 大判錦絵	国立音楽大学附属図書館 竹内道敬文庫
	76	無款	山王御祭礼 聖代行の四君子	嘉永7(1854)年	1枚 大奉書判錦絵	国立音楽大学附属図書館 竹内道敬文庫
	77	歌川国貞(三代 豊国)	神田大明神 御祭礼之図	弘化2(1845)年頃	大判錦絵3枚続	国立音楽大学附属図書館 竹内道敬文庫
前期	78	歌川芳艷	新材木町附祭礼	文久2(1862)年	大判錦絵3枚続	国立劇場
後期	79	歌川芳女	五節句の内三節の見立 新材 木町 新乗物町	文久2(1862)年6月	大判錦絵3枚続	国立音楽大学附属図書館 竹内道敬文庫
	80	豊原国周	花競神田祭礼 げい者小植の おきの 助高屋高助	明治17(1884)年8月	1枚 大判錦絵	国立音楽大学附属図書館 竹内道敬文庫
後期	81	歌川国貞 (三代豊国) / 歌川広重	双筆五十三次 加奈川	嘉永7(1854)年	1枚 大判錦絵	東京都江戸東京博物館
	82	楊洲周延	見立十二支 申 南伝馬町花 車	明治26(1893)年	1枚 大判錦絵	国立音楽大学附属図書館 竹内道敬文庫
6章 近代化社会における異性装						
前期	83	落合芳幾	東京日々新聞813号	明治7(1874)年10月	1枚 錦絵	東京都江戸東京博物館
後期	84	落合芳幾	東京日々新聞969号	明治3(1870)年3月	1枚 錦絵	東京都江戸東京博物館
前期	85	長谷川 貞信	大阪錦画日々新聞紙24号 男と して七年暮らした女	明治時代	1枚 錦絵	東京大学大学院法学政治学研 究科附属 近代日本法政史料セ ンター 明治新聞雑誌文庫
後期	86	長谷川貞信	大阪錦画新話5号 女装の男が 巡査に捕まる	明治時代	1枚 錦絵	東京大学大学院法学政治学研 究科附属 近代日本法政史料セ ンター 明治新聞雑誌文庫
前期	87	昇斎一景	東京名所三十六戯撰 隅田川 白ひげ辺	明治5(1872)年	1枚 錦絵	東京都江戸東京博物館
	88		塩原名物女装 おいらん清ちゃん		写真	三橋順子蔵
	89		『風俗奇譚』 昭和39(1964)年1月臨時増刊号 ／ 昭和42(1967)年1月臨時増刊号	昭和39(1964)年1月・ 昭和42(1967)年1月	雑誌	三橋順子蔵

展示 期間	no.	作者	作品名	時代	員数・材質・形状	所蔵者
	90	下岡 蓮枝	(職人の扮装をした女性)	文久3-明治8 (1863-75)年頃	鶏卵紙	東京都写真美術館
	91		松竹歌劇団／大阪松竹歌劇団		パンフレット・雑誌	個人蔵
	92	濱谷浩	東京浅草 国際劇場 男装の麗人ターキー リハーサルの夜	昭和13(1938)年	ゼラチン・シルバー・プリント(D.O.P)	東京都写真美術館
	93	高島華宵	《光》華宵便箋表紙原画	大正末～昭和初期 (20世紀)	紙 水彩	弥生美術館
	94	高島華宵	《わすれなぐさ》『少女の友』口絵	昭和7(1932)年	紙 印刷	弥生美術館
	95	高島華宵	モダンダンス		紙 インク・墨	弥生美術館
	96	高島華宵	「乱刃の巷」(『日本少年』1926年1～12月号)挿絵(校正刷り)	大正15／昭和元 (1926)年	紙 印刷	弥生美術館
	97	橘小夢	澤村田之助	昭和9(1934)年	木版	弥生美術館
	98	橘小夢	中村もしほ	昭和10(1935)年	木版	弥生美術館
前期	99	結城正明	神功皇后洗髪図	明治22(1889)年	1幅 絹本着色	東京藝術大学大学美術館
	100	石井林響	童女の姿になりて	明治39(1906)年	1幅 絹本着色	東京都現代美術館
後期	101	上村松園	静	昭和14(1939)年	1幅 絹本着色	東京国立近代美術館
	102	田中千代	いかり肩スーツ	昭和20(1945)年	上衿ラベルから見返しまで黒のベルベットのトリミングのあるウールギャバジンのジャケットとウールギャバジンのタイトスカート	渋谷ファッション&アート専門学校
	103		『サンデー毎日』	昭和29(1954)年	雑誌	シモース深雪蔵
	104	丹羽阿樹子	街頭所見(セーラー服の三人)	昭和戦前期(20世紀)	1面 絹本着色	京都市美術館

7章 現代の異性装

	105	手塚治虫	リボンの騎士(少女クラブ版)	昭和28-31(1953-56)年 『少女クラブ』連載	デジタル出力	©手塚プロダクション
	106	池田理代子	ベルサイユのばら	昭和47-48(1972-73)年 『週刊マーガレット』連載	原画	池田理代子プロダクション
	107	江口寿史	ストップ!! ひばりくん!	昭和56-58 (1981-1983)年 『週刊少年ジャンプ』連載	デジタル出力	作家蔵
	108	木村 恒久	(縛られた女装の男)		ゼラチン・シルバー・プリント、コラージュ、着色	東京都写真美術館
	109	山崎 博	笠井叡と大野一雄	昭和47(1972)年	ゼラチン・シルバー・プリント(D.O.P)	東京都写真美術館
	110	大野一雄	ラ・アルヘンチーナ頌 ポスター	昭和52(1977)年	ポスター	慶應義塾大学アート・センター/NPO法人舞踏創造資源
	111	大野一雄	ラ・アルヘンチーナ頌 ハガキ	昭和52(1977)年	ハガキ	慶應義塾大学アート・センター/NPO法人舞踏創造資源
	112	大野一雄	ラ・アルヘンチーナ頌 パンフレット	昭和52(1977)年	パンフレット	慶應義塾大学アート・センター/NPO法人舞踏創造資源
	113	村山知義	フンメルのワルツアを踊っている私	大正12(1923)年	写真	個人蔵 (神奈川県立近代美術館 寄託)
後期	114		『意識的構成主義的小品展覧会』図録	大正12(1923)年	冊子	個人蔵 (神奈川県立近代美術館 寄託)
一部 展示 替え	115		村山知義旧蔵 スクラップブック 2、5		スクラップブック	個人蔵 (神奈川県立近代美術館 寄託)
前期	116		『マヴォ』1号、2号	1号:大正13(1924)年7月 2号:大正13(1924)年8月	雑誌	個人蔵 (神奈川県立近代美術館 寄託)
前期	117		『マヴォ』3号	平成3(1991)年(原書 発行 大正13(1924)年)	雑誌	神奈川県立近代美術館 斎藤義重文庫
後期	118	村山知義	著作原稿	大正14(1925)年	紙、鉛筆、ペン	個人蔵 (神奈川県立近代美術館 寄託)
後期	119		『中央美術』9巻7号	大正12(1923)年7月	雑誌	神奈川県立近代美術館
	120	監督:松本俊夫 ATG	『薔薇の葬列』(映画)より予告 映像および『エクスタシス』	昭和44(1969)年	映像	NPO法人 戦後映像芸術アーカイブ
	121	デザイン:朝倉 摂	『薔薇の葬列』ポスター	昭和44(1969)年	ポスター	早稲田大学坪内博士 記念演劇博物館
	122		『上海異人娼館 チャイナ・ ドール』(映画)パンフレット	昭和56(1981)年	パンフレット	シモース深雪蔵

展示 期間	no.	作者	作品名	時代	員数・材質・形状	所蔵者
	123	製作・編集：天 井 棧 敷 作曲： J・A・シー ザー、クニ河 内、田中未知、 加藤ヒロシ、 オッフエンバッ ハ 作詞：寺山修 司、鶴飼正英 歌：東郷健、J・ A・シーザー、 山谷初男、森崎 偏陸ほか A.D.： 榎本了彦 写真： 篠山紀信	薔薇門	昭和47(1972)年	レコード	山中透蔵
	124		『王女メディア』（舞台）パンフ レット	昭和58(1983)年	パンフレット	シモース深雪蔵
	125		『ザ・ロッキー・ホラー・ ショー』（ミュージカル）パン フレット	昭和61(1986)年	パンフレット	シモース深雪蔵
	126		『ラ・カージュ・オ・フォール』（ ミュージカル）パンフレット	昭和60(1985)年	パンフレット、チラシ	個人蔵
	127		『蔵の中』（映画）パンフレット		パンフレット	シモース深雪蔵
	128		『夜叉ヶ池』（映画） パンフレット		パンフレット	シモース深雪蔵
	129	角達也	『男娼の森』	昭和24(1949)年	書籍	三橋順子蔵
	130	曾我廼家桃蝶	『芸に生き、愛に生き』	昭和41(1966)年	書籍	三橋順子蔵
	131		『演劇評論』	昭和30(1955)年以降	雑誌	三橋順子蔵
	132		『くいーン』1988年8月号／ 1994年8月号	昭和63(1988)年／ 平成6(1994)年8月	雑誌	三橋順子蔵
	133		『ひまわり』1988年1月号／ 1994年新年号『ひまわり 向 日葵学園女子高等学校』（女子 学生制服女装推進委員会編） 1995年	昭和63(1988)年1月／ 平成6(1994)年1月／ 平成7(1995)年7月	雑誌	三橋順子蔵

8章 現代から未来へと続く異性装

	134	森村泰昌	MのセルフポートレートNo.73 (あるいは鏡を持つ自画像)	平成6(1994)年	ゼラチン・シルバー・ プリント	作家蔵(豊田市美術館寄託)
	135	森村泰昌	光るセルフポートレート(女優) ／白いマリリン	平成8(1996)年	エクタカラー・ウルトラII	作家蔵(豊田市美術館寄託)
	136	森村泰昌	セルフポートレート(女優)／ バルドーとしての私・2	平成8(1996)年	イルフォクローム	豊田市美術館
	137	篠山紀信	森村泰昌『デジャ＝ヴュ』の眼	平成2(1990)年	写真	作家蔵
	138	ダムタイプ	S/N 記録映像(編集版)	平成6(1994)年	映像	ダムタイプ蔵
	139	ダムタイプ	S/N, CD	平成7(1995)年	CD	プブ・ド・ラ・マドレーヌ蔵
	140	企画：ダムタイ プ	『メモランダム 古橋悌二』	平成12(2000)年	書籍	個人蔵
	141	DIAMONDS ARE FOREVER	CQ ! CQ ! This is POST CAMP	令和4(2022)年	ミクストメディア	DIAMONDS ARE FOREVER

・展示期間が書いていない作品は、通期展示

特別展

ビーズ ーつなぐ かざる みせる 国立民族学博物館コレクション National Museum of Ethnology Collection : Beads in the World

会期＝令和4(2022)年11月15日(火)～令和5(2023)年1月15日(日)

会場＝地下1階主陳列室、2階サロン・ミュージーゼ、特別陳列室

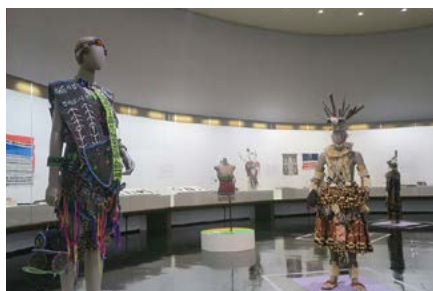
主催＝渋谷区立松濤美術館、国立民族学博物館、公益財団法人千里文化財団

ビーズは、さまざまな部材に穴を開け、糸などでつないだ人類最古の装飾品のひとつである。その素材は土、石、ガラスと多様であり、各材質を生かした仮面、衣装、装飾品、人形が世界各地でつくられた。ビーズをつくり、身につけることは、地域や時代を問わず普遍的におこなわれる人類の営みであり、人類が古来より積み重ねてきた歴史や文化の一端がビーズには凝縮されているといえよう。

本展は、国立民族学博物館所蔵のビーズに関する資料を「ビーズとは何か」「多様な素材」「あゆみ」「つくる」「ビーズで世界一周」「グローバル時代のビーズ」という6つのテーマで紹介した。世界中から採集されたビーズをとおり、各国の文化や環境、歴史の多様性を知る機会となった。

展覧会関連イベントでは、国立民族学博物館教授で本展監修者の池谷和信氏による記念講演会「人間にとってビーズとはなにか」と、佐古孝子氏(ビーズ織り作家)、中村香子氏(東洋大学教授)、川口幸也氏(元立教大学教授)、池谷和信氏によるシンポジウム「ビーズからのメッセージーつなぐ・かざる・みせるー」を開催した。また、当館学芸員によるワークショップ「ビーズでミニ・クリスマスリースをつくろう!」では、さまざまな素材と形のビーズをモールでつないで、小さなクリスマス・リースを制作した。いずれのイベントも多くの方にご参加いただいた。

なお、本展では、ビーズを身に着けた来館者は通常料金から2割引で入館ができる「ビーズ割引」を実施した。



出品目録

資料管理名	国/地域	所蔵先
ビーズとは何か		
貝貨	ミクロネシア連邦	国立民族学博物館
育児用お守り	南アフリカ	国立民族学博物館
多様な素材		
植物		
首飾り	サモア	国立民族学博物館
首飾り	コロンビア	国立民族学博物館
首飾り	ボツワナ	国立民族学博物館
首飾り	パプアニューギニア	国立民族学博物館
首飾り(レイ)	アメリカ合衆国	個人
卵殻		
首飾り	ナミビア	国立民族学博物館
女性用前掛け	ナミビア	国立民族学博物館
腕飾り	ボツワナ	国立民族学博物館
貝		
首飾り	パプアニューギニア	国立民族学博物館
首飾り	パプアニューギニア	国立民族学博物館
首飾り	セネガル	国立民族学博物館
首飾り	アメリカ合衆国	国立民族学博物館
首飾り	台湾	国立民族学博物館
歯・牙		
首飾り	ブラジル	国立民族学博物館
首飾り	マレーシア	国立民族学博物館
頭飾り	ソロモン諸島	国立民族学博物館
首飾り	ブラジル	国立民族学博物館
首飾り	台湾	国立民族学博物館
土・虫・サンゴ・鳥の羽根		
頭飾り	パプアニューギニア	国立民族学博物館
首飾り	パプアニューギニア	国立民族学博物館
腕飾り	台湾	個人
首飾り	ネパール	国立民族学博物館

資料管理名	国/地域	所蔵先
首飾り	ブラジル	国立民族学博物館
首飾り	タイ	個人
骨・ツメ・ウロコ		
首飾り	アメリカ合衆国	国立民族学博物館
首飾り	アメリカ合衆国	国立民族学博物館
男性用腰帯	ブラジル	国立民族学博物館
壁飾り	ブラジル	国立民族学博物館
首飾り	ブラジル	国立民族学博物館
首飾り	ケニア	国立民族学博物館
金属		
首飾り	エチオピア	個人
腰飾り	ケニア	国立民族学博物館
あゆみ		
貝の道		
イス(神像付き)	パプアニューギニア	国立民族学博物館
子どもを背負うための皮製袋	エチオピア	個人
戦闘用胸あて	インド	国立民族学博物館
戦闘用小手あて	インド	国立民族学博物館
戦闘用腕あて	インド	国立民族学博物館
帽子	コンゴ民主共和国	国立民族学博物館
かばん	マーシャル諸島	国立民族学博物館
石の道		
首飾り	インド	個人
首飾り	インド	個人
頭飾り	インド	個人
手割り極小ビーズ	アフガニスタン	個人
腕飾り	アフガニスタン	個人
ガラスの道		
古代オリエント		
ミイラのビーズマスク	エジプト	個人
フルーツのビーズ	エジプト	個人(K O B E とんぼ玉 ミュージアム寄託羽原コ レクション)
牛と花のビーズ	エジプト	個人(K O B E とんぼ玉 ミュージアム寄託羽原コ レクション)

資料管理名	国/地域	所蔵先
海洋生物と幾何文のビーズ	エジプト	個人(K O B E とんぼ玉 ミュージアム寄託羽原コ レクション)
アイビーズ連	-	個人(K O B E とんぼ玉 ミュージアム寄託羽原コ レクション)
アイビーズ	-	個人(K O B E とんぼ玉 ミュージアム寄託羽原コ レクション)
アイビーズ	-	個人(K O B E とんぼ玉 ミュージアム寄託羽原コ レクション)
アイビーズ	中国	個人(K O B E とんぼ玉 ミュージアム寄託羽原コ レクション)
人面玉	エジプト	個人(K O B E とんぼ玉 ミュージアム寄託羽原コ レクション)
人面玉	エジプト	個人(K O B E とんぼ玉 ミュージアム寄託羽原コ レクション)
ゴールドサンドイッチ・ビーズ	-	個人(K O B E とんぼ玉 ミュージアム寄託羽原コ レクション)
ヴェネツィアンビーズ		
首飾り	イタリア	個人
首飾り	ミャンマー	個人
首飾り	インド	個人
ホワイト・ハート	イタリア	個人
シェブロンケイン(6層青)	イタリア	個人
シェブロンビーズ	イタリア	個人
首飾り	イタリア	個人
アヴェンチュリン・ペスタッチョ	イタリア	個人
ラティチーノビーズ(スパイラルレース)	イタリア	個人
フィオラーテビーズ	イタリア	個人
ピューマータ ピューマーテ フェザービーズ	イタリア	個人
極小フィオーレ 指こがし	イタリア	個人
アヴェンチュリン・カンネビーズ	イタリア	個人
フィオーレビーズ	イタリア	個人
江戸とんぼ玉		
江戸とんぼ玉	日本	個人

資料管理名	国/地域	所蔵先
アイヌ玉		
首飾り	日本	国立民族学博物館
首飾り	日本	国立民族学博物館
首飾り	日本	国立民族学博物館
首飾り	日本	国立民族学博物館
首飾り	日本	国立民族学博物館
首飾り	日本	国立民族学博物館
首飾り	日本	国立民族学博物館
つくる		
人像(ビーズ製)	ナイジェリア	国立民族学博物館
ビーズの原石	インド	個人
石材の剥離成形用ハンマー	インド	個人
成形段階の石材	インド	個人
成形段階の石材	インド	個人
成形段階の石材	インド	個人
小型のボタン型ビーズを研磨するときの石材保持具	インド	個人
研磨、再加熱、最終段階のビーズ	インド	個人
ダチョウの卵殻	ナミビア	国立民族学博物館
卵殻に穴をあけるための錐	ボツワナ	国立民族学博物館
けずり具	ボツワナ	国立民族学博物館
オリックスの腱(ビーズをつなぐひも)	ボツワナ	個人
ダチョウの卵殻	ボツワナ	個人
腕飾り	ボツワナ	国立民族学博物館
首飾り	マーシャル諸島	国立民族学博物館
首飾り	ミクロネシア連邦	国立民族学博物館
ウミギクガイ	-	個人
首飾り	ソロモン諸島	国立民族学博物館
ビーズで世界一周		
オセアニア		
仮面	パプアニューギニア	国立民族学博物館
頭飾り	パプアニューギニア	国立民族学博物館
首飾り	フィジー	国立民族学博物館
首飾り	フィジー	国立民族学博物館

資料管理名	国/地域	所蔵先
首飾り	ミクロネシア連邦	国立民族学博物館
首飾り	トンガ王国	国立民族学博物館
中央・南アメリカ		
上衣	エクアドル	国立民族学博物館
たすき飾り	ペルー	国立民族学博物館
頭飾り	ブラジル	国立民族学博物館
首飾り	ブラジル	国立民族学博物館
首飾り	ブラジル	国立民族学博物館
首飾り	ブラジル	国立民族学博物館
仮面	メキシコ	国立民族学博物館
首飾り	メキシコ	国立民族学博物館
容器	メキシコ	国立民族学博物館
首飾り	パナマ	国立民族学博物館
北アメリカ		
女性用衣装	グリーンランド(デンマーク)	国立民族学博物館
耳飾り	アメリカ合衆国	国立民族学博物館
手袋	アメリカ合衆国	国立民族学博物館
靴	アメリカ合衆国	国立民族学博物館
靴	アメリカ合衆国	国立民族学博物館
貝製ビーズ(ワムパム)	アメリカ合衆国	国立民族学博物館
弾薬入れ袋	アメリカ合衆国	国立民族学博物館
ハロウィン飾り(首飾り)	アメリカ合衆国	個人
ヨーロッパ		
バッグ	イギリス	国立民族学博物館
上衣	イギリス	国立民族学博物館
スリッパ	ブルガリア	国立民族学博物館
ボンネット	チェコ	国立民族学博物館
首飾り	マケドニア	国立民族学博物館
首飾り	ロシア	個人
アフリカ		
女性用婚礼衣装	南アフリカ	国立民族学博物館
花嫁用肩掛け	南アフリカ	国立民族学博物館
女性用スカート	南アフリカ	国立民族学博物館

資料管理名	国/地域	所蔵先
頭飾り	ボツワナ	国立民族学博物館
首飾り	ボツワナ	国立民族学博物館
仮面	コンゴ民主共和国	国立民族学博物館
儀礼用衣装一式	コンゴ民主共和国	国立民族学博物館
女性用装飾品	ケニア	個人
首飾り	ケニア	国立民族学博物館
コルセット	南スーダン	国立民族学博物館
北アフリカ・西アジア		
首飾り	モロッコ	国立民族学博物館
首飾り	モロッコ	国立民族学博物館
首飾り	サウジアラビア	国立民族学博物館
女性用ネクタイ	アフガニスタン	国立民族学博物館
首飾り	サウジアラビア	国立民族学博物館
首飾り	イエメン	国立民族学博物館
袋	イラン	国立民族学博物館
足首飾り	サウジアラビア	国立民族学博物館
首飾り	サウジアラビア	国立民族学博物館
南アジア		
首長用帽子	インド	国立民族学博物館
頭飾り	パキスタン	国立民族学博物館
首飾り	インド	国立民族学博物館
首飾り	インド	国立民族学博物館
首飾り	インド	国立民族学博物館
首飾り	インド	国立民族学博物館
東南アジア		
未婚女性の衣装	タイ	国立民族学博物館
首飾り	タイ	国立民族学博物館
首飾り	タイ	国立民族学博物館
クッションカバー	ミャンマー	国立民族学博物館
女性用上衣	タイ	国立民族学博物館
背負い運搬具	インドネシア	国立民族学博物館
背負い運搬具	インドネシア	国立民族学博物館
首飾り	インドネシア	国立民族学博物館

資料管理名	国/地域	所蔵先
首飾り	インドネシア	国立民族学博物館
女性用腰衣(儀礼用)	インドネシア	国立民族学博物館
東アジア(台湾)		
頭飾り	台湾	国立民族学博物館
女性用衣装	台湾	国立民族学博物館
腰巻	台湾	国立民族学博物館
日本		
首飾り	日本	国立民族学博物館
首飾り	日本	国立民族学博物館
玉飾り	日本	国立民族学博物館
首飾り	日本	個人
腕飾り	日本	個人
ビーズバッグ	日本	国立民族学博物館
ビーズバッグ	日本	国立民族学博物館
ビーズバッグ	日本	国立民族学博物館
ビーズバッグ	日本	国立民族学博物館
ビーズバッグ	日本	国立民族学博物館
ビーズバッグ	日本	国立民族学博物館
ビーズバッグ	日本	国立民族学博物館
首飾り	日本	国立民族学博物館
首飾り	日本	国立民族学博物館
首飾り	日本	個人
グローバル時代のビーズ		
首飾り	ケニア	個人
首飾り	パキスタン	個人
首飾り	ガーナ	個人
首飾り	ガーナ	個人
ビーズ刺繍サンプル(トラ)	日本	タジマ工業株式会社
ビーズテープ	日本	タジマ工業株式会社
ビーズ刺繍サンプル(アルファベット)	日本	タジマ工業株式会社
貴婦人と一角獣	日本	日本創作ビーズ織り協会 サコタカコ創作ビーズ織り本部
織機	日本	日本創作ビーズ織り協会 サコタカコ創作ビーズ織り本部

資料管理名	国/地域	所蔵先
絵画「乳搾りの女」	ナイジェリア	国立民族学博物館
ワイヤー・ビーズ(カバ)	日本	個人
ワイヤー・ビーズ(クドゥ)	南アフリカ	個人
ワイヤー・ビーズ(キリン)	日本	個人
ワイヤー・ビーズ(ナマクワカメレオン)	日本	個人
ワイヤー・ビーズ(マダガスカルアデガエル)	日本	個人
ワイヤー・ビーズ(ミーアキャットの家族)	日本	個人
ガラスビーズサンプル	日本	トーヨー株式会社
ガラスビーズサンプルカード	日本	個人

2023 松濤美術館公募展

2023 Shoto Museum of Art Exhibition of Works by the General Public

会期＝令和5（2023）年3月22日（水）～3月28日（火）

会場＝地下1階主陳列室

主催＝渋谷区立松濤美術館

1981年の開館当初から続いている松濤美術館公募展は、本年度で40回目となった。渋谷区に在住、在勤および在学の方々の創作活動の活性化を目的としており、日頃から渋谷区を支えてくださっている方々の作品発表の場として着実に定着してきた。

本年の公募展には、16歳から86歳までの幅広い年齢層の方々から、94点の力作が応募された。感染症の流行から3年が経ち、停滞した雰囲気の中にも希望を見出すような作風も見られ、困難な状況にも負けずに制作に取り組む皆様の情熱が伝わる作品が多く寄せられた。

応募作品は、3名の審査委員により厳正な審査を行い、その中から58点が入選した。またそのうち、下記の通り13点の受賞作品が選ばれた。受賞者は10代から80代までの各年代にわたり、授賞式にて表彰された。なお、奨励賞受賞作品のうち1点が応募条件を満たしていないことが判明したため、入選及び賞を取り消した。その結果、奨励賞受賞作品は定数より1点少ない9点となっている。

審査状況

応募作品総数 94点

入選作品総数 58点

【学生優秀賞】

月村 美里唯 《凝視》

【奨励賞】

荻野 えい子 《西原の松ぼっくり》

米原 祐子 《漁師の気まぐれ》

鈴木 トミ子 《再始動！》

成清 一生 《交戦》

香田 勝弘 《カスバの調べ》

三輪 このみ 《おやまさんの楽園》

森下 利典 《Ukraine2022》

鈴木 治子 《亀》

小西 真理 《窓に溶ける》

審査委員

内田 あぐり（審査委員長・日本画家）

岡部 友子（美術史家）

小杉 小二郎（洋画家）

【松濤美術館賞】

新井 賢治 《苔穴と滝湯》

【優秀賞】

永瀬 智美 《羊と街》

安西 よるか 《僕の中の知らない場所》



松濤美術館賞
新井賢治《苔穴と滝湯》



Salon Exhibition “Nostalgia of Photography / Special Exhibition: Images of the Great Kanto Earthquake”

主催＝渋谷区立松濤美術館

特別陳列室で開催した「関東大震災のイメージ」は、当時の政治・社会・文化に多大なる影響を与えた関東大震災について、その被災状況を描き・写した作品群を展示した。南薫造が描いた水彩画、写真芸術社の一員であった掛札功の写真、そして山崎静村が旧蔵していた当時の写真絵葉書など11点という少数の展示であったが、当館所蔵の関東大震災の関連作品を一望する貴重な機会となった。また、「写真のノスタルジア」展と緩やかな関連性をもたせたことで、1923年前後の東京という都市にまつわる芸術表現を、複数の視点から検討する機会ともなった。



出品目録

	作家名	作品名	制作年	技法／材料
写真のノスタルジア				
第一章 光と其諧調				
1	掛札功	作品名不詳		ゼラチンシルバークラウド
2	石田喜一郎	アーガイル・カット、シドニー	1922年	ブローマイド
3	掛札功	利根川	1922年頃	ゼラチンシルバークラウド
4	福原信三	廣告板 作品集「巴里とセーヌ」の10	1913-1921年	ゼラチンシルバークラウド
5	石田喜一郎	橋の連作 其の四 橋畔	1923年	ゼラチンシルバークラウド
6	福原信三	釣り 作品集「巴里とセーヌ」の4	1913-1921年	ゼラチンシルバークラウド
7	福原信三	池畔 作品集「巴里とセーヌ」の7	1913-1921年	ゼラチンシルバークラウド
8	石田喜一郎	ファンタジー	1922年	ブローマイド
9	石田喜一郎	静かなる朝の小川	1924年	ブローマイド
10	石田喜一郎	朝雲り	1924年	ブローマイド
11	石田喜一郎	露地	1923年	ブローマイド
12	石田喜一郎	影	1923年	ブローマイド
13	大田黒元雄	作品名不詳(川辺の散歩) 手製作品集(無題)より	1921年頃	ゼラチンシルバークラウド
14	大田黒元雄	作品名不詳(窓) 手製作品集(無題)より	1921年頃	ゼラチンシルバークラウド
15	大田黒元雄	作品名不詳(室内) 手製作品集(無題)より	1921年頃	ゼラチンシルバークラウド
16	大田黒元雄	作品名不詳(駅) 手製作品集(無題)より	1921年頃	ゼラチンシルバークラウド
17	掛札功	作品名不詳		ゼラチンシルバークラウド
18	大田黒元雄	作品名不詳(小舟) 手製作品集(無題)より	1921年頃	ゼラチンシルバークラウド
19	石田喜一郎	砂丘の上	1923年	ブローマイド
20	石田喜一郎	朝の光	1921年	ブローマイド
21	福原信三	作品名不詳(三津海岸風景)	1926年	ゼラチンシルバークラウド
22	掛札功	野菊咲く頃	1921年頃	ゼラチンシルバークラウド
23	掛札功	もやひ船	1922年頃	ゼラチンシルバークラウド
24	石田喜一郎	清掃	1925年	ゼラチンシルバークラウド
25	石田喜一郎	橋の連作 其の三	1923年	ゼラチンシルバークラウド
26	大田黒元雄	作品名不詳(樹下) 手製作品集(無題)より	1921年頃	ゼラチンシルバークラウド
第二章 写真のノスタルジア				
27	石田喜一郎	錦町河岸	1925年	ブローマイド

	作家名	作品名	制作年	技法／材料
28	石田喜一郎	夏座敷	1925年頃	ゴム印画
29	大田黒元雄	作品名不詳(漁) 手製作品集(無題)より	1921年頃	ゼラチンシルバークラフト
30	大田黒元雄	作品名不詳(雪屋根) 手製作品集(無題)より		ゼラチンシルバークラフト
31	大田黒元雄	作品名不詳(雪の民家庭先) 手製作品集(無題)より	1925年	ゼラチンシルバークラフト
32	大田黒元雄	作品名不詳(田舎屋) 手製作品集(無題)より		ゼラチンシルバークラフト
33	掛札功	お茶の水	1920年	ゼラチンシルバークラフト
34	掛札功	作品名不詳	1925年	ゼラチンシルバークラフト
35	掛札功	作品名不詳	1925年	ゼラチンシルバークラフト
36	掛札功	作品名不詳		ゼラチンシルバークラフト
37	大田黒元雄	作品名不詳(寺の軒下) 手製作品集(無題)より	1921年頃	ゼラチンシルバークラフト
38	掛札功	春日神社道		ゼラチンシルバークラフト
39	掛札功	仁王像、長野	1921年頃	ゼラチンシルバークラフト
40	掛札功	浅草	1920年	ゼラチンシルバークラフト
41	掛札功	作品名不詳	1925年	ゼラチンシルバークラフト
42	石田喜一郎	作品名不詳	1930年代	ブロンズオイルプリント
43	石田喜一郎	作品名不詳	1930年代	ブロンズオイルプリント
44	掛札功	浅間牧場	1921年	ゼラチンシルバークラフト
45	福原信三	新麦の穂		フォトグラビュール
46	福原信三	作品名不詳		ゼラチンシルバークラフト
47	石田喜一郎	縁先		ゼラチンシルバークラフト
48	福原信三	温泉場	1930年代前半	ゼラチンシルバークラフト
49	福原信三	池 其一	1930年代前半	ゼラチンシルバークラフト
50	福原信三	作品名不詳	1925年頃	フォトグラビュール
51	掛札功	芦ノ湖 箱根	1921年	ゼラチンシルバークラフト
52	掛札功	鯉 於日比谷公園		ゼラチンシルバークラフト
53	福原信三	櫓のトンネル	1930年代	ゼラチンシルバークラフト
	関連資料			
	福原信三著	『光と其諧調 福原信三寫眞画集』	1923年	書籍
	編集発行兼印刷人 安成三郎	寫眞藝術 1巻1号	1921年6月	書籍
	編集発行兼印刷人 安成三郎	寫眞藝術 1巻2号	1921年7月	書籍
	編集発行兼印刷人 安成三郎	寫眞藝術 1巻4号	1921年9月	書籍

	作家名	作品名	制作年	技法／材料
	編集発行兼印刷人 安成三郎	寫眞藝術 1巻5号	1921年10月	書籍
	編集発行兼印刷人 安成三郎	寫眞藝術 1巻6号	1921年11月	書籍
	編集発行兼印刷人 安成三郎	寫眞藝術 1巻7号	1921年12月	書籍
	編集発行兼印刷人 安成三郎	寫眞藝術 2巻2号	1922年2月	書籍
	編集発行兼印刷人 安成三郎	寫眞藝術 2巻3号	1922年3月	書籍
	編集発行兼印刷人 安成三郎	寫眞藝術 2巻4号	1922年4月	書籍
	編集発行兼印刷人 安成三郎	寫眞藝術 2巻5号	1922年5月	書籍
	編集発行兼印刷人 安成三郎	寫眞藝術 2巻8号	1922年8月	書籍
	編集発行兼印刷人 安成三郎	寫眞藝術 2巻9号	1922年9月	書籍

特別陳列 関東大震災のイメージ

1	南薫造	大震災東京スケッチ	1923年頃	水彩、紙
2	南薫造	大震災東京スケッチ 築地	1923年	水彩、紙
3	南薫造	大震災東京スケッチ 駿河台	1923年	水彩、紙
4	南薫造	大震災東京スケッチ	1923年頃	水彩、紙
5	南薫造	大震災東京スケッチ	1923年頃	水彩、紙
6	南薫造	大震災東京スケッチ 仰英和女学校	1923年頃	水彩、紙
7	南薫造	大震災東京スケッチ	1923年頃	水彩、紙
8	南薫造	廃墟	1923年頃	油彩、キャンバス
9	南薫造	関東大震災直後	1923年頃	油彩、キャンバス
10	掛札功	大正12年9月	1923年	ゼラチンシルバー・プリント
11	山崎静村旧蔵	作品名不詳(関東大震災)	1923年	ゼラチンシルバー・プリント

Ⅲ 展覧会カタログ・関連書籍 等

令和4（2022）年度



特別展『SHIBUYAで仏教美術—奈良国立博物館コレクションより』
29.7×21.0cm

全126p、カラー図版及び解説（対英訳）：103p

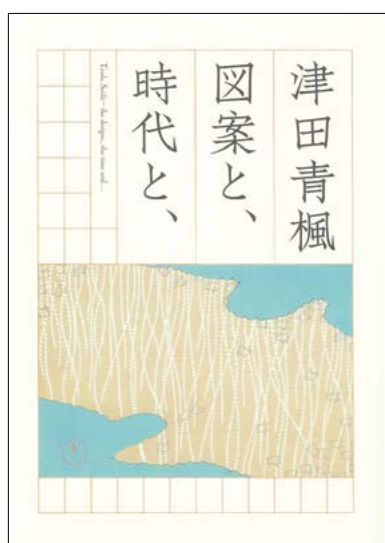
編集・発行：渋谷区立松濤美術館

発行日：2022年4月9日

「奈良国立博物館のコレクションについて」（内藤 栄 奈良国立博物館名誉館員）

「展覧会に寄せて」（西岡康宏 渋谷区立松濤美術館前館長）

作品リスト



特別展「津田青楓 図案と、時代と、」

21.0×14.7cm

全191p、カラー図版及び章解説（対英訳）：145p

編集・発行：渋谷区立松濤美術館

発行日：2022年6月18日

「津田青楓 九十七年一貫した制作の姿勢」（大平奈緒子 渋谷区立松濤美術館 学芸員）

「偉大な図案家、津田青楓に関する覚え書き」（スコット・ジョンソン 関西大学名誉教授）

「津田青楓・図案の革新」（山田俊幸 大正イマジユリィ学会 常任委員）

「津田青楓 図案と、時代と、」略年譜

作家解説

主要参考文献

出品作品目録



特別展「装いの力—異性装の日本史」

25.6×18.3cm

全190p、カラー図版及び章解説（対英訳）：143ページ

編集・発行：渋谷区立松濤美術館

発行日：2022年9月3日

「異性装の力 その魅力と威力」（三橋順子 性社会文化史研究者）

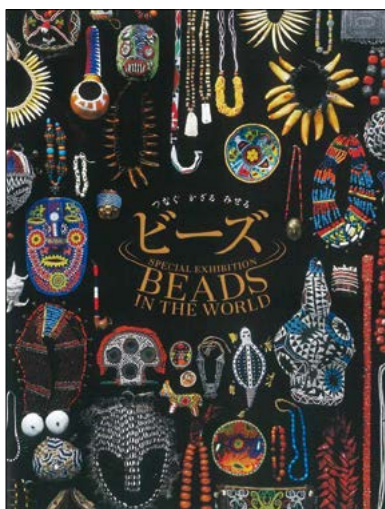
「ヨーロッパにおける異性装—性の混同の恐怖と社会規範—」

（新實五穂 お茶の水女子大学 基幹研究院 人文科学系 准教授）

「「装いの力」の可能性—日本の異性装の「これまで」と「これから」」（西美弥子 渋谷区立松濤美術館 学芸員）

作品リスト/作品解説

主要参考文献



『ビーズ 一つなぐ かざる みせる 国立民族学博物館コレクション』

21.6×16.5cm

全135p

編者：池谷和信

編集協力：小山茂樹（有限会社 ブックポケット）

発行：国立民族学博物館

発行日：2017年3月9日（初版発行）

2022年3月30日（再版第3刷発行）

I部—ビーズとは何か

II部—人類史とビーズ

III部—人はなぜビーズを身につけるのか

IV部—世界ビーズめぐり

V部—グローバル時代の美を求めて



「2023 松濤美術館公募展」

25.7×18.2cm

全32p、カラー図版：27p

編集・発行：渋谷区立松濤美術館

発行日：2023年3月22日

- ・「2023 松濤美術館公募展」の審査を終えて（内田あぐり 審査委員長）
- ・入選作品目録
- ・2023 松濤美術館公募展応募・入選状況



『サロン展 写真のノスタルジア／特別陳列 関東大震災のイメージ』

18.2×18.2cm

全32p、カラー図版：27p

編集・発行：渋谷区立松濤美術館

発行日：2023年3月22日

- ・作品解説／作家解説

IV 館蔵品貸出状況

作家名	作品名	展覧会名	貸出先	会期	貸出期間
秋山泰計	夢の旅Ⅱ(部分)	東京・区立美術館 ネットワーク連携事業 東京の猫たち	目黒区美術館	2022年 4月23日～ 6月12日	2022年 4月14日～ 6月23日
秋山泰計	夢の旅ⅡB猫(部分)	東京・区立美術館 ネットワーク連携事業 東京の猫たち	目黒区美術館	2022年 4月23日～ 6月12日	2022年 4月14日～ 6月23日
合田佐和子	海神のお供…白夜	合田佐和子展 帰る途もつもりもない	高知県立美術館 三鷹市美術 ギャラリー	2022年 11月3日～ 2023年 1月15日 2023年 1月28日～ 3月26日	2022年 8月2日～ 2023年 4月11日
合田佐和子	ミュータント(い)	合田佐和子展 帰る途もつもりもない	高知県立美術館 三鷹市美術 ギャラリー	2022年 11月3日～ 2023年 1月15日 2023年 1月28日～ 3月26日	2022年 8月2日～ 2023年 4月11日
合田佐和子	極彩色のタマゴ 小	合田佐和子展 帰る途もつもりもない	高知県立美術館 三鷹市美術 ギャラリー	2022年 11月3日～ 2023年 1月15日 2023年 1月28日～ 3月26日	2022年 8月2日～ 2023年 4月11日

V 新規受贈作品

2022年度 新規受贈作品

村田勝四郎 《鵜》

原型制作 1936(昭和11)年 ブロンズ 高76.3 幅22.0 奥行42.8 (cm)

寄贈者: 古関登代子氏



村田勝四郎(1901年8月10日～1989年3月22日)は大阪生まれの彫刻家。東京美術学校(現・東京藝術大学)に学び、朝倉文夫の指導を受けたが、その後は安藤照や堀江尚志といった彫刻家とともに「塊人社」の結成に参加し、独自の活動の道を模索した。戦前は塊人社展ほか帝展、新文展、戦後はおもに新制作協会展に出展した。昭和6(1931)年から現・渋谷区元代々木町にアトリエを構え、昭和60(1985)年に渋谷区立松濤美術館に作品48点を寄贈し、当館では同年『受贈記念特別陳列 村田勝四郎の彫刻』展を開催、また令和2(2020)年にもサロン展で『彫刻家・村田勝四郎と日本野鳥の会』展を開催している。

村田は大正8(1919)年に大阪府立天王寺中学校を卒業(第21回生)しているが、今回の寄贈作《鵜》は、同校の1学年下(第22回生)であった中田伸直氏の旧蔵作で、その娘である古関登代子氏よりご寄贈いただいたもの。中田氏は長じて渋谷に住んだ縁で、近所にいた村田と再会し、交流があったという。

本作のモデルは作者が庭で飼育していた「河鵜」である。村田は昭和10(1935)年に、前年に設立されたばかりの

「日本野鳥の会」に入会している。会誌『野鳥』（第4巻第2号）に彼が寄稿した「彫刻と鳥」という文章から、この河鵜は、昭和11(1936)年に、同じく会員で鳥類学者の清棲幸保伯爵に貰い受けたものだったと分かる。村田の写真アルバムには、同年7月に撮影した河鵜の写真【図1】や、8月に撮影したその塑像の写真【図2】が残されており、本作品の制作過程がたどれる。

村田は「彫刻と鳥」で、絵画では有力な素材である鳥だが、彫刻では優作を余り知らないとし、理由として立体における造形化の難しさを指摘している。また自ら飼育する河鵜からは二つ彫刻をつくったのだが「一つは翼を畳んだ塊の極く単純なもの、もう一つは翼を半分擴げたもの」であり、「後者は量の統一を得るのに難儀した」「ひろげた翼を粘土で作るとなると、お煎餅みたいな土の塊はどうしても心棒無しでは支へ切れないので、針金で形をとって、それに金網を張って萬全を期するなど、全く手数の掛かるものになる。而かも飛翔といふ神秘的な性能を有する翼の眞髓を衝くことは實に容易な業ではないのである」と述べている。鳥は、これ以後も村田が何度も彫刻で取り組む主要テーマとなるが、本作はおそらく愛鳥の観察に基づいて、あえて困難な細い足と体のバランスや、軽やかな翼の表現に挑んだ最初期の例だったのだろう。

なお、この昭和11(1936)年末の12月、村田は「第1回主戦美術協会展」に《裸婦》(渋谷区立松濤美術館収蔵品目録Ⅱ 彫40)とともに『鵜』と題した作品を出品していて、本作と同原型の作品がこれにあたっていた可能性も想像できる。また彼はこの原型を気に入っていたようで、後年には縮小版ともいえる小像《カウウ》(渋谷区立松濤美術館収蔵品目録Ⅱ 彫42)をブロンズで制作している。この小型作品のほうは昭和60(1985)年の松濤美術館の受贈作品中にすでに含まれていたため、今回の寄贈により、同じ原型に基づく大小の鵜が収蔵品中に揃うこととなった。

(学芸員 平泉千枝)

図1



昭和11(1936)年7月

図2



昭和11(1936)年8月

2022年度 新規受贈作品

森芳雄 スケッチ、資料群

寄贈者：門田正子氏

森芳雄(1908年12月21日～1997年11月10日)は、戦後の日本洋画壇、とりわけ主体美術展や自由美術展などの在野美術団体で活躍した画家である。また、長年にわたり渋谷区西原を拠点としていたことから、渋谷ゆかりの作家のひとりといえよう。

森は明治41(1908)年に東京市麻布区芝北新門前町(現・港区東麻布)に生まれた。幼少期に叔母・森ふみの養子となるが、昭和6(1931)年までは実家で生活をしていたという。大正14(1925)年、17歳で東京府豊多摩郡代々幡町代々木西原(現・渋谷区西原)へ転居。翌年と昭和2(1927)年に東京美術学校を2回受験するも失敗し、昭和3(1928)年には代々木・山谷に創設されたばかりの1930年協会絵画研究所に通う。同所で洋画家の中山巍(1893年～1978年)に師事した。そこでデッサンや油絵を学んだ後に1930年協会展、二科展、独立展に出品、入選をはたす。

昭和6(1931)年に渡仏。翌年秋のサロン・ドートンヌに《黄色のカーディガン女》が入選するほか、海老原喜之助(1904年～1970年)や山口薫(1907年～1968年)など、同世代の画家たちと交流する。昭和9(1934)年に帰国すると養母の家であった上智町(現・渋谷区広尾)に移り住むが、昭和20(1945)年の空襲により家が全焼し、戦前期に制作した作品の多くが失われた。その後、西原の地に戻り、昭和60(1985)年まで同地にアトリエを構えた。晩年は世田谷区に移り、平成9(1997)年に逝去した。

このように画家を志してから円熟期を迎えるまでの重要な期間を渋谷で過ごしたこともあり、当館ではその功績をたたえ、昭和56(1981)年の記念すべき第1回特別展において「森芳雄」展を開催している。また、平成22(2010)年にはサエグサ・ギャラリーより油彩画《冬の松》をご寄贈いただいていることから、当館にとって重要な作家のひとりといえる。

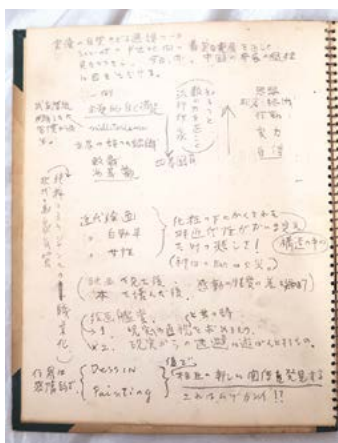
今回、ご遺族よりデッサンや資料の中から当館にスケッチブック3冊、デッサン、ドローイングが描かれたまぐりの作品12点、資料3点、計18点を寄贈いただいた。右の作品リストに示したとおり、人体デッサンが多くを占めている。これは、森が代表作の《二人》(1950年 紀伊國屋書店蔵)や《動》(1960年 神奈川県立近代美術館蔵)のような人物を主題にした作品を多数制作していたことに起因するのだろう。

また、デッサンの他に、メモや文章が書かれているスケッチブックが1冊ある。その中には、社会問題に対する感想とともに、「絵画鑑賞 1.現実への直視と其の詩を求めるもの 2.現実からの逃避に遊ばんとするもの」や「行為は感情的で Dessin Painting 後で相互の新しい関係を見出すことはムツカシイ!？」【図1】といった記述があり、デッサンや言葉をかきながら思考やアイデアを整理したことがうかがえる。

なお、本資料群の中には日本基督教会の牧師であり、森の義兄であった堀内友四郎の名前がある「鶴見教会週報 第16号」(1951年)も含まれる。森は10代で画家を志したが、それを反対していた義母を堀内が説得したという。また堀内はその際に洋画家・白瀧幾之助を森に紹介して石膏デッサンを学ぶきっかけもつくった。この資料からは、森と堀内との交流が長年つづいていることがうかがえる。

今後は、これらの作品や資料を活用しながら、より調査研究を深めていきたい。

(学芸員 野城今日子)



【図1】 森芳雄
「スケッチブック」
(作品リストNo.1)
制作年不詳 2頁

番号	画像	タイトル	年代	状態	寸法 (cm)	素材	備考
1		無題	制作年不詳	スケッチブック	28.6×23.0	鉛筆、紙	全10枚
2		無題	制作年不詳	スケッチブック	46.0×38.4	鉛筆、紙	全19枚
3		無題	制作年不詳	スケッチブック	53.0×38.6	鉛筆、紙	全18枚
4		無題	制作年不詳	まくり	50.0×32.3	木炭、紙	
5		無題	制作年不詳	まくり	32.1×47.9	木炭、紙	
6		無題	制作年不詳	まくり	25.4×36.2	鉛筆、紙	

番号	画像	タイトル	年代	状態	寸法 (cm)	素材	備考
7		無題	制作年不詳	まくり	25.6×36.7	鉛筆、紙	
8		無題	制作年不詳	まくり	33.4×25.7	鉛筆、紙	
9		無題	制作年不詳	まくり	35.9×25.6	鉛筆、紙	
10		無題	制作年不詳	まくり	25.4×35.8	鉛筆、紙	
11		無題	制作年不詳	まくり	27.4×38.2	鉛筆、紙	
12		無題	制作年不詳	まくり	36.0×25.5	鉛筆、紙	

番号	画像	タイトル	年代	状態	寸法 (cm)	素材	備考
13		無題	制作年不詳	まくり	20.0×26.6	鉛筆、紙	
14		無題	制作年不詳	まくり	35.9×25.0	ペン、紙	
15		無題	制作年不詳	まくり	33.4×25.0	鉛筆、紙	
16		無題	制作年不詳	まくり	37.5×52.3	鉛筆、紙	
17		無題	制作年不詳	まくり	41.0×33.7	鉛筆、紙	
18		鶴見教会週報	制作年不詳	まくり	18.0×25.0	印刷	

2022年度 新規受贈作品

白井晟一 《戒 莫作諸悪衆善奉行》

年代不詳 紙本墨書 高104.7 幅27.8 (cm)

寄贈者：真鍋真氏



建築家・白井晟一(1905年～1983年)はそのキャリアを通して文字に格別の関心を抱き続けた。特に1960年のヨーロッパ旅行から帰国して以降、顧之昏元の号を使って毎日のように書をしたためたことが知られている¹。本作はSFイラストレーションで名高い真鍋博(1932年～2000年)に贈られた書であり、ご子息の真鍋真氏からご寄贈を賜ったものである。哲学的な建築家とも称され、難解な印象を与える白井と、商業誌をベースに数多くの仕事をなした真鍋、一見対極的にも見える両者が、近いコミュニティに居たことを示す貴重な作例と言えるだろう。

具体的な作品について見ていく。ひときわ太い墨線で、大きな「戒(かい)」の字が書かれる。一般には送り仮名を伴って「いましめ」と読まれるこの字は、仏教用語では修行規則を守ろうとする自発的な精神を意味する²。下には続けて「莫作諸悪 衆善奉行(ばくさしゅあく しゅぜんぶぎょう)」とあるが、その意味するところは「もろもろの悪をなさず、すべての善を行う」である³。この文句は最古の仏典とされる『法句経』に収められている。なお、

句の前半部分は通常「諸悪莫作 衆善奉行」と書かれるため、『法句経』とは前句の語順が入れ代わっている。白井が30歳ほど年下の真鍋に対して、人生の心得をその場で教え諭したのだろうか。

一方で、半紙が巻き込まれている簡素な軸装には、献辞の言葉「謹呈 真鍋博学兄 白井晟一」との記載がある。まさに現在活躍中の作家とはいえ、年少者を「学兄」と呼んでいるのである。白井は建築現場視察の際、職人にもわけへだてなく接し非常に慕われたというが、そうした彼の人間性の一端がうかがえる。

とはいえ、白井と真鍋の接点については今後の検討を要する。手がかりとなるのは、1960年代における建築評論家・川添登(1926年～2015年)と真鍋との関係だろう。川添は1953年に『新建築』の編集長となり、『原爆堂計画』(1954年)や『善正寺本堂』(1956年)を中心とする白井建築を大々的に取り上げた。そして両者は1960年代以降も近い関係性を保っていた。一方の川添と真鍋の接点は、1960年前後から次第に形成されてきたようである。1962年、川添や建築家の菊竹清訓らを中心としたメタボリズム・グループが展覧会「都市計画と都市生活展 あなたの都市はこうなる」(西武百貨店・池袋本店)を企画するが、本展では協力者として真鍋博の名がクレジットされている。また、1964年、未来都市論を旺盛に発表していた川添は、加藤秀俊・梅棹忠夫・林雄二郎・小松左京らと共に「万国博覧会を考える会(別名、貝食ふ会)」を結成、一方の真鍋は同年の1年間、『建築文化』の表紙イラストを担当、そこでは様々な未来都市のイメージが披露された。万博直前の69年には真鍋と加藤が共同編集、川添が執筆に加わり『2001年の日本』(朝日新聞社)が出版されている。このように、川添と真鍋は、60年代の未来都市ブームの中で並走していたのである。後年のインタビューにおいても川添は真鍋について「わりあい仲よかったんですよ」と回想している⁴。そのため真鍋が川添の人間関係の中から白井晟一と出会う機会を得ても不思議ではなく、その場合、本作はやはり1960年代の作と見るのが妥当だろう。真鍋真氏にお尋ねしたところ、60年代前半にもらいうけたものではないかと思うが、日記等の記録はない、とのご回答をいただいた。

白井晟一の書に関するこれまでの先行研究では、白井の思想と書作品の結びつき、いわば白井晟一に内在する書の意味が論じられてきた。しかし一方で、本作品のように白井が書を人に「贈る」ことがしばしばあった、という事実にはあまり光が当たっていなかったように思われる。贈り物——思想を伝達する「メディア」としての書の機能について考えたとき、これまで閑却されていた、白井晟一から建築家や編集者などに向けて送付された(しばしば、極めて太い万年筆や毛筆で書かれた)書簡類も、白井の書作品の星座のなかに位置づけて考察することが可能となるはずだ。

(学芸員 木原天彦)

¹ 「白井晟一年譜」『白井晟一全集 補遺』1988年、同朋舎出版、121頁。

² 『岩波仏教辞典 第三版』岩波書店、2023年、449頁。

³ 前掲註2に同じ

⁴ 「川添登オーラル・ヒストリー 第2回」中西礼仁、鷺田めるろによるインタビュー、2009年3月24日、日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイブ、(https://oralarthistory.org/archives/interviews/kawazoe_noboru_02/)、最終アクセス2024年1月30日

VI 教育普及

1 講演会

専門家や関係者を招き、各特別展の展覧内容に関連した講演会を開催。

令和4(2022)年度実績

期日	テーマ	講師(経歴は当時のもの)	参加者
4月24日(日) 午後2時～	奈良国立博物館の仏教美術コレクション	岩井共二(奈良国立博物館 学芸部美術室長)	35人
6月26日(日) 午後2時～	津田青楓・富本憲吉・藤井達吉の時代	山田俊幸(大正イマジュリィ学会常任委員)	28人
9月10日(土) 午後2時～	写真でたどる女装と男装の近・現代史	三橋順子(性社会文化史研究者)	38人
11月19日(土) 午後2時～	人間にとってビーズとはなにか	池谷和信(本展監修者・国立民族学博物館教授)	33人

2 美術教室

区内在住、在勤、在学者を対象に絵画等の実技指導を行う。

令和4(2022)年度実績

教室	講師	期間・回数	曜日・時間	参加者 (応募者)
子ども美術教室	(株)ヘソ 須藤千賀、 浅井晶木	7月29日、30日・2回	金、土曜日・午後2時～4時	金:7人(13) 土:9人(13)
水彩画教室	根岸尚徳	9月29日～10月27日・5回	木曜日・午後2時～4時	10人(24)
油絵・アクリル画教室	原良介	9月30日～10月28日・5回	金曜日・午後2時～4時	10人(15)

3 コンサート

令和4(2022)年度実績

実施日	コンサート名	出演者	演奏曲	参加人数
5月15日(日) 午後2時～3時15分	雅楽演奏会 悠久の調べ～まほろばの国から	笹本武志 (雅楽演奏家)	古楽器(龍笛と正倉院尺八)による雅楽の演奏。 演奏曲の説明の後、演奏を行った。	19人

4 ギャラリートーク

令和4(2022)年度実績

実施日	展覧会名	参加者
4月23日(土)	SHIBUYAで仏教美術—奈良国立博物館コレクションより	34人
5月13日(金)	〃	45人
5月22日(日)	〃	42人
7月1日(金)	津田青楓 図案と、時代と、	26人
7月9日(土)	〃	26人
7月24日(日)	〃	25人
9月23日(金・祝)	装いの力—異性装の日本史	60人
10月8日(土)	〃	57人
10月16日(日)	〃	62人
11月18日(金)	ビーズ—つなぐ かざる みせる 国立民族学博物館コレクション	21人
11月26日(土)	〃	18人
1月8日(日)	〃	46人
3月25日(土)	サロン展 写真のノスタルジア 特別陳列 関東大震災のイメージ	4人
3月26日(日)	〃	16人

5 展覧会関連イベント

令和4(2022) 年度実績

実施日	イベント名	出演者	参加者
7月10日(日) 午後2時～	特別イベント 木版摺りの実演	森光美智子(浮世絵木版画彫摺技術保存協会会員) 井上孝一(美術書出版株式会社芸艸堂)	25人
7月17日(日) 午後2時～	特別講座 津田青楓の図案の世界	大平奈緒子(本展担当学芸員)	29人
9月17日(土) ①午前10時30分～ ②午後2時～	パフォーマンス記録映像 ダムタイプ《S/N》特別上映	オペレーター：山中透(作曲家、プロデューサー、DJ)	①37人 ②38人
9月25日(日) ①午後12時30分～ (初心者コース) ②午後3時30分～ (テクニカルコース)	女装メイク講座	美寿羽楓(女装専門フォトスタジオアルテミス代表)	①13人 ②15人
10月1日(土) 午後2時～	特別講座 日本における異性装—展覧会開催にあたって	西美弥子(本展担当学芸員)	38人
10月9日(日) 午後5時～	スペシャル・トークセッション Drag Queen in Japan ～異性を装うとは何か？ジェンダーとセクシュアリティの見地から～	シモース深雪、プブ・ド・ラ・マドレーヌ 司会：三橋順子	43人
10月30日(日) 午後2時～	パフォーマンス日本舞踊＋トーク	まつ乃家栄太郎、三橋順子	90人
12月10日(土) 午後2時～	シンポジウム ビーズからのメッセージ—つなぐ・かざる・みせる—	佐古孝子(ビーズ織り作家) 中村香子(東洋大学教授) 川口幸也(元立教大学教授) 池谷和信(本展監修者・国立民族学博物館教授)	48人
①12月17日(土) 午前11時～ ②12月23日(金) 午後2時～	ビーズでミニ・クリスマスリースをつくろう！	当館学芸員	①86人 ②22人

6 建築ツアー

白井晟一設計の当館内を建築に関する説明を聞きながら見学します。

令和4(2022)年度実績

実施日	時間は各日午後6時～	参加者
11月18日(金)		12人
11月25日(金)		9人
12月2日(金)		7人
12月9日(金)		12人
12月16日(金)		10人
12月23日(金)		10人
1月6日(金)		19人
1月13日(金)		20人

※ビーズ展期間中を除き、新型コロナウイルス感染症対策のため開催中止

VII 入館状況

令和4(2022)年度実績

展 覧 会 名	期 間	入館者数	1日平均 入館者数
SHIBUYAで仏教美術 —奈良国立博物館コレクションより	4/9(土)～ 5/29(日) 43日間	10,957人	255人
津田青楓 図案と、時代と、 装いの力—異性装の日本史	6/18(土)～ 8/14(日) 49日間	8,953人	183人
ビーズ一つなく かざる みせる 国立民族学博物館コレクション	9/3(土)～10/30(日) 50日間	26,833人	537人
2023 松濤美術館公募展	11/15(火)～ 1/15(日) 48日間	9,455人	197人
サロン展 写真のノスタルジア 特別陳列 関東大震災のイメージ	3/22(水)～ 3/28(火) 6日間	1,034人	172人

令和4(2022)年度実績

4月1日(金)	理事会
4月8日(金)	特別展「SHIBUYAで仏教美術－奈良国立博物館コレクションより」展特別披露
4月9日(土)	特別展「SHIBUYAで仏教美術－奈良国立博物館コレクションより」展始まる
4月24日(日)	講演会「奈良国立博物館の仏教美術コレクション」 講師:岩井共二(奈良国立博物館 学芸部美術室長)
5月17日(火)	理事会
5月29日(日)	特別展「SHIBUYAで仏教美術－奈良国立博物館コレクションより」展終了
6月8日(水)	評議員会
6月8日(水)	理事会
6月17日(金)	特別展「津田青楓 図案と、時代と、」展特別披露
6月18日(土)	特別展「津田青楓 図案と、時代と、」展始まる
6月26日(日)	講演会「津田青楓・富本憲吉・藤井達吉の時代」 講師:山田俊幸(大正イマジネーション学会常任委員)
8月14日(日)	特別展「津田青楓 図案と、時代と、」展終了
9月1日(木)	理事会
9月1日(木)	評議員会
9月2日(金)	特別展「装いの力－異性装の日本史」展特別披露
9月3日(土)	特別展「装いの力－異性装の日本史」展始まる
9月10日(土)	講演会「写真でたどる女装と男装の近・現代史」 講師:三橋順子(性社会文化史研究者)
10月30日(日)	特別展「装いの力－異性装の日本史」展終了
11月14日(月)	特別展「ビーズ－つなぐ かざる みせる 国立民族学博物館コレクション」展特別披露
11月15日(火)	特別展「ビーズ－つなぐ かざる みせる 国立民族学博物館コレクション」展始まる
11月19日(土)	講演会「人間にとってビーズとはなにか」 講師:池谷和信(本展監修者・国立民族学博物館教授)
1月15日(日)	特別展「ビーズ－つなぐ かざる みせる 国立民族学博物館コレクション」展終了
2月14日(火)	理事会
2月28日(火)	評議員会
3月21日(火)	「2023 松濤美術館公募展」授賞式
3月22日(水)	「2023 松濤美術館公募展」始まる サロン展「写真のノスタルジア 特別陳列 関東大震災のイメージ」始まる
3月28日(火)	「2023 松濤美術館公募展」終了 サロン展「写真のノスタルジア 特別陳列 関東大震災のイメージ」終了

IX 組織

公益財団法人渋谷区文化・芸術振興財団

当館は、渋谷区の委託を受けて、公益財団法人渋谷区文化・芸術振興財団が運営している。企画展等に関わる諸事業は、機敏でしかも柔軟な経理活動が伴わなければ効果的に推進することが難しいため、行政の公会計制度から独立した財団の財務会計によって計画的な事業を推進することで区民文化の振興を目指しているのである。財団は区の出資により設立され、独自の組織と所要経費をもち、開館時間、休館日、入館料等の美術館の基本的利用条件の決定を除き、施設の維持管理、展観事業及び文化活動の全般にわたって委託されている。



※令和5年3月31日現在

X 利用案内

開館時間

〔特別展〕

午前10時～午後6時

＊金曜日は午後8時まで開館

＊最終入館は閉館30分前まで

〔公募展・サロン展〕

午前9時～午後5時

＊最終入館は閉館30分前まで

休館日

毎週月曜日（祝日は除く）

国民の祝日の翌日（土・日曜日は除く）

年末年始（12月29日～1月3日）

展示替期間

入館料

展覧会毎に異なります。

＊団体（10名以上）のお客様が同時に入館される場合及び渋谷区民の入館料は、2割引となります。

＊障がい者とその付添の方各1名は無料です。入館の際に障がい者手帳等をご提示ください。

＊金曜日に入館される渋谷区民の方は無料です。入館の際に住所のわかるものをご提示ください。

＊土・日曜日、休日、夏休み期間中、小中学生は無料です。

案内図



主要交通機関

京王井の頭線

ハチ公バス

JR山手線・東京メトロ・東急電鉄

＊駐車場はありません。

神泉駅下車 徒歩5分

渋谷駅より「丘を越えてルート（上原・富ヶ谷ルート）」にて

「松濤美術館入口」下車 徒歩5分

渋谷駅ハチ公口下車 徒歩15分

渋谷区立松濤美術館 紀要 第1号

BULLETIN of The Shoto Museum of Art No.1

白井晟一と京都高等工芸学校

平泉千枝(渋谷区立松濤美術館 学芸員)

「異端の建築家」¹とも称される白井晟一(1905年～1983年、戸籍上の漢字は「白井成一」)は昭和を代表する建築家のひとりであり、その彼の最晩年の代表作のひとつが渋谷区立松濤美術館の建築である。当館では開館40周年を記念して、「白井晟一入門」展(第1部 2021年10月23日～12月12日、第2部 2022年1月4日～30日)を開催し、展覧会の公式図録兼書籍『白井晟一入門』青幻舎、2021年)も刊行された。

だが白井は伝説や逸話に取り巻かれた存在で、展覧会開催時点でも依然として実像がわからない面が多々あった。よく、ドイツで哲学を学んだ後に独学した、と語られる彼の建築に関する教育、技術習得の過程もそのひとつである。ただし、白井は留学以前、10代の終わりから20代のはじめという多感な時期に、京都高等工芸学校(現・京都工芸繊維大学)に在学していた。本稿では、展覧会では掘り下げられなかった部分の反省も含め、この京都高等工芸学校での教育について、もう少し整理してみることにしたい。

これまでの評伝・年譜における京都高等工芸学校の記述

まずこれまではこの学校時代はどのように語られてきたのか。白井に関する代表的な評伝として、親交のあった建築評論家の川添登(1926年～2015年)が生前の1978年に刊行した『白井晟一 建築とその世界』が知られる²。川添は本書の編集のさい、白井からの示唆でさらに正確な年譜を作成するために口述の書き取りやインタビューを行った。本人の記憶違いや記録の紛失により、辻褄の合わない部分もあったというが、川添がさらに関係者の聞き取りなどで補充し、白井本人に確認も取ったものを、死後に公表した評伝が「白井晟一論ノート」(『近代建築』2007年、以下『ノート』と記す)である³。それとは別に、この川添の記録も参考にしながら、没後の白井特集号となった雑誌『建築文化』(1985年2月号)で、白井の長男・彪介^{ひょうすけ}と次男・昱磨^{いくま}が監修し、平井俊晴が作成した詳細な年譜(以下『年譜』と記す)がある⁴。長くなるが、以下にこの『ノート』と『年譜』の、おもに白井の述懐による京都高等工芸学校時代について抜粋し紹介してみる。

・「白井晟一論ノート」より(以下「」内は抜粋箇所)

(白井は)「中学の高学年になるにしたがって、哲学を学びたいと思うようになり、それには一高(第一高等学校)に入らねばと心に誓い、ドイツ語を学び始めた。」

しかし、一高の受験に失敗した後、姉で画家の近藤浩一路に嫁いでいたきよから助言を受けたという。

「失意の心をいだいて京都に戻った晟一は、人にすすめられるままに京都高等工芸学校(現・京都工芸繊維学校)に入学した。その建築科に入ることを強くすすめたのは、実は姉のきよであった。近藤きよ夫人は、晟一に建築家になるようにすすめたのは私です、と誇らしげに語られていた。京都高等工芸学校に入ったものの、およそ気が入らず、学校の空気にもなじめなかった。学校をサボっては、絶えず奈良に出かけ、仏像をみてまわり、町や村のどこの角にポストがある、といったことをそらんじてしまうほど、よく歩きまわった。」

「また、京大の教室にもぐりこんで、哲学の講義をきいたりしてもいたが、そのような晟一にとって、京都高等工芸学校での救いは、京大哲学科の若い学生たちが、アルバイトに教えに来ていたことである。」

こうして、白井は京都帝国大学文学部哲学科出身の若き哲学者、戸坂潤に兄事するようになったという。

「しかし学校の方は欠席しがちで、三年の過程を四年かかって卒業した。それも卒業などどうでもいいと投げやりの気分になっていた時、たまたま道で校長に出会い、卒業制作だけは出しておくようにと諭され、その晩、一夜づけで仕上げた図面を提出して、ようやく卒業を認められたのだという。けれども設計に興味がなかったわけではない。当時、まだなかった流線型の自動車を、アイデア・スケッチにして美しい絵に描き、近所の子どもにあげたりしていたのだから、デザインに対して、人に倍するセンスと興味をもっていたことは確か、学校でも設計

製図だけは、クラスの誰にもひけを取らなかったという。そして20歳頃になると、家具を設計して、タンスで有名な京都の宮崎木工に製作を依頼し、真四角やまん丸のソファをつくり、自分の部屋に置いたりしていた。」
「京都高等工芸学校をまがりなりにも卒業したものの、哲学への夢は捨てきれず、なんとかして京大の哲学科へ入る道はないものかと考え、戸坂潤に紹介されて、京大哲学科の教授で美学者の深田康算に相談しにいったところ、無理をして京大にはいるよりは、ドイツに留学することをすすめられ、文化哲学で当時日本でも評判の高かったハインリッヒ・リッケルトに紹介状を書いてくれた。こうして晟一は、深田康算の紹介状と、姉が都合してくれた金貨とを懐に入れ、希望に胸を大きくふくらませながら、シベリア経由でドイツに渡ったのである。昭和3年、23歳の時であった。」⁵

ついで『年譜』のなかで、とくに学校時代が記された1924～1928年の項目をみてみよう。

・「年譜」より

大正13(1924)年 19歳

4月、京都高等工芸学校(現・京都工芸繊維大学)建築科に入学する。建築図面を引く成績ではトップに立っていたというが、教室にいる日は少なく京都大学で田辺哲学を聞いたり、奈良を歩き回って寺院や仏像を眺めていたという。また「エラン・ヴィタル」という劇団の活動にも参加していた。

大正15/昭和1(1926)年 21歳

戸坂潤が京都高等工芸学校の講師となったため、白井は彼を兄事し、一層、哲学に対する関心を増幅させる。そして戸坂の紹介で、当時、京都大学の優れた美学者であった深田康算の門をたたく。その時、深田に言われた、「建築家になるなら、その技術はいつでも習得できる。大切なのは、その内容であり、つまり哲学である」という言葉は、白井にとって一生、忘れえぬものとなったようである。

(中略)

「学校は落第して4年間いました。落第というのは軍事教練に出ないものですからね。実際は半年も行かなかったですね。しかし、ドイツの学校で勉強するつもりでしたから、ドイツ語を一生懸命やっていました。」

昭和3(1928)年 23歳

3月、京都高等工芸学校卒業。この年、母・えん死去(享年54歳)。これを契機に深田康算の推せんもあって渡欧を決意。ハインリッヒ・リッケルトを尋ね、ハイデルベルク大学に入学する⁶。

以上である。川添の『ノート』や、白井の子息らが監修した『年譜』は、直接白井を知る人々による貴重な記録という点から今後も第一級の基礎文献であり続けるだろう。ただし川添にしても白井の約20歳年下という関係性を考えると、自分の知り得ない時代に関しては、白井の言葉にある程度そのまま依拠しなければならなかっただろうと想像される。

白井が確かに大正13(1924)年から昭和3(1928)年まで在学していたことは、『京都高等工芸学校一覧』など、学校側作成の記録からも裏づけられる⁷。一方白井側の証言で目につくのは、「サボって」「欠席しがち」「教育にいる日は少なく」「半年も行かなかったですね」といった言葉で学校との関わりが繰り返し否定され、むしろ隣接の京都帝国大学の哲学科への興味が強調されていることである。

また誤解もある。白井の姉のきよは、弟が「建築科」に入ったと述べているが、この当時京都高等工芸学校にあったのは「色染科」「機械科」「図案科」の三科であり、白井が学んだのは「図案科」である。しかし、きよの言葉は別の意味で興味深いのである。明治35(1902)年に開設された同校の最初の図案科教授は洋画家の浅井忠だったが、開設の翌年、東京帝国大学工科大学出身で“関西近代建築の父”と称される建築家の武田五一(1872年～1938年)が留学から帰り、31歳の俊英の図案科主任教授として着任する⁸。武田は大正7(1918)年に名古屋高等工芸学校校長に転任、ついで大正9(1920)年には京都帝国大学工学部建築学科の教授に転任し、白井の在学時は隣の大学の方

にいたわけだが、後任として武田の招聘で明治41(1908)年にやってきた東京帝国大学建築学科出身の建築家・本野精吾(1882年～1944年)が図案科の教授として指導にあたっていた⁹。つまり、「図案科」での教育とは、武田や本野など有力な建築家らが関与するものであり、弟が「建築科」にいたという姉の認識もゆえなきことではない。しかし、白井の証言からは自身の建築家としての形成を考える上では少なからぬ意味を持つと見られるこうした情報が、すっかり抜け落ちているのである。

京都高等工芸学校「図案科」における建築教育

では、白井の時代の「図案科」での教育、とりわけそのなかでも建築教育はどのようなものだったのか。京都高等工芸学校は、地元の要請により産業振興につながる高度な美術専門の技術者養成、意匠や工芸の技術の向上を目指して設立された学校だった。その図案科の初期の教師陣、すなわち武田五一、本野精吾、向井寛三郎の教育について、宮島久雄による一連の詳細な研究がある¹⁰。この章では、主にこの宮島の先行研究に拠りながら、ふり返ってみたい。

ポイントはいくつかあるが、最初のひとつは、今日の「図案科」という言葉で想起されるデザイン学科のイメージとは異なり、初期の図案科は建築教育を担う側面もあった、ということである。すべての学校の図案科について一概に述べることはできないが、宮島は京都高等工芸学校設立の6年前の明治29(1896)年、東京美術学校(現・東京藝術学校)に、開校時にはなかった「図案科」が建築科を含む形で新設され、大正3(1914)年には分科されて第一部が図案、第二部が建築となり、最終的には大正12(1923)年に第二部が図案科から独立して「建築科」となったという経緯に注目している。背景に、当時の近代日本の建築界で、建築とは何か、建築教育はどうあるべきか、をめぐる議論が熟しつつあり、建築を工業的な技術としてだけではなく美術として見る伊東忠太などの主張も起こっていたという事情がある。東京美術学校設立に尽力した岡倉天心は、明治27(1894)年に学校拡大に関する構想のなかで、建築やその他工芸で「理化学的」と「美術的」の両方の性質を併せ持つ分野があることに触れ、各々の性質に属する高等教育の場合、前者は帝国大学や国立工業学校、後者は高等美術学校で特に様式や装飾に特化して教えるのが適当ではないか、と述べたりもしている¹¹。この言葉から推測されるのは、当時、建築の美術的側面が議論されるなかで、従来の工学系の大学とは異なる美術的建築教育を担う場の創出が意識されてきたのではないかということだ。

第二に、こうしたなか、東京帝国大学の工科大学造家学科(のちの東京大学工学部建築学科)を首席で卒業し、同校の助教授をつとめ東京美術学校でも教官として「用器画、建築装飾術、建築装飾史」などを教えていた武田五一に、明治33(1900)年文部省から「図案学」の研究のために英独仏への留学が命じられる。このときすでに京都高等工芸学校の新設、その図案科の指導を浅井忠と武田が担うことは既定路線で、研究目的が「建築学」ではなく「図像学」だったのも着任への準備のためと考えられている。翌年出国した武田は欧州を周遊し、マッキントッシュなどグラスゴー派、ウィーンの分離派、フランスのアール・ヌーヴォーなど、建築や工芸と結びついた最新の装飾美術の動向について見聞を深め、明治36(1903)年に帰国するや、図案科主任の教授として職務を開始する。武田は3年後、開校当時に浅井が急ごしらえで作成した図案科のカリキュラムを改訂し、教育課程をつくりあげる¹²。その3年間の課程の特徴は「図学」と「図案学」の講義と実践を中心とするシステムであり、宮島はこれを、「第一に模写から始めて新案の作成へと達する段階を踏むこと、第二には図案の図面の作成技術を重視すること、第三に考案者の意図を正確に表現するような新案図面を作成させようとする」とまとめている¹³。

カリキュラムのうち大きく時間を割かれている「図案学及実習」はさらに「図案学」「色彩学」「建築装飾」「画学及画学実習」「日本画」「装飾計画」「粘土造型」に枝分かれしている。建築と名がつくものは「建築装飾」だけだが、そのなかでは「室内装飾ノ説明概略」「住宅ノ説明」「欧風住宅各室ノ装飾法」「欧風住宅各室ノ家具ノ説明及其ノ寸法」「日本風住宅各室ノ装飾法」「日本風住宅各室ノ家具調度」から「建築装飾材料及加工法」「装飾的家屋構造法」「使用及予算」など、多様なことが教えられたようである。また「装飾計画」のなかでも、三年生になると「室内装飾模写」や「食堂用器具新案」「椅子及卓子新案」など室内図案の作成が課せられたようだ¹⁴。建築教育という点でいえば、これは武田自身が学んできた、構造学、応用力学、測量学、建築製図など建築技術を網羅的に習得する工学

系大学での専門教育に比べ、明らかに装飾や家具などインテリア面に偏っているといえる¹⁵。また多様なニーズがある産業界で働く技術者育成を目的とした学校ゆえ、各分野へ対応が意図された、専門的というより総合的教育とならざるを得ないところもあったのだろう。ただし、武田の図案教育はそれだけにとどまらないところがあった。

第三のポイントとして、宮島は、武田には独特の“図案学観”があったことを指摘する。これによれば武田にとって「図案」とはほぼ「図面」のことを意味しているのだが、武田は「図案ハ要スルニ立案者ノ意志創意ヲ完全ニ平面上ニ表シ工作上ノ指導ト為スヲ以テ目的トスルモノ」と述べていた。つまり図案作成を、考案者の「創意」を出発点とし、その伝達および実現のための手段として重視し、独立的な技術としてとらえていたのであり、この大局的な「図案」の考えならば、その適応の対象は美術工芸あるいは建築にも限定しない幅広さを持つ¹⁶。武田自身も、建築以外に家具、テキスタイルデザイン、絵画もこなすマルチな人で、後の京大建築学科の創成期には多種の講義を受け持つような全能型の秀才だった。京都高等工芸学校の学生にはまずは図案での表現技術を磨くことが求められたが、卓越した製図の腕で知られた武田の学生への実技指導は厳しいものだったという。また花瓶図案や皿図案といった用器図案でさえ、断面図、側面図、皿の場合は俯瞰図が付されるといった、建築図面における平面図、立面図に匹敵するような図面を求めた¹⁷。ただ、こうした武田の一種独自の図案教育について、近代日本の建築界の理解が追い付いていただろうかは心もとない。

なお、宮島によれば、開校から10年間で図案科の落第(未卒)の割合は、初年度の約3割からそれほど変わらず推移し、それだけ厳しい教育行われていたこと、裏返せば卒業生は優秀であったことが類推されるという。またこの間の毎年30名前後の図案科の卒業生の約半分がデザイン系、半数が建築関係に就職していたという¹⁸。

白井晟一が学んだ時代の京都高等工芸学校について

白井晟一が京都高等工芸学校に入学した時は、開校からすでに22年が経過していた。だが武田の後任の本野精

図案科(学科課程)		毎 週 教 授 時 数								
		第一学年			第二学年			第三学年		
課目	細目	一学期	二学期	三学期	一学期	二学期	三学期	一学期	二学期	三学期
修身	修身	1	1	1	1	1	1	1	1	1
数学物理学化学	数学	2	2	2						
	物理学	3	3	2						
	化学	5	5	5						
物理学化学実習	物理実習	3	3	3						
	化学実習			3						
英語	英語	3	3	3	3	3	3	3	2	
図学及実習	図学	1	1	1						
	図学実習	6	6	6	3	3	3			
美術工芸史	美術工芸史	1	1	2	3	3	2	1	1	1
色染学及実習	色染学				1	1	1			
	色染実習								6	
機織学及実習	機織及組織	2	2	2						
	機織実習									6
生物学	博物学				3	3	3			
	動物及人体解剖							2	2	
物品学	物品学				2	2	2	2	2	2
図案学及実習	図案学				2	2				
	色彩学					1	1			
	建築装飾				1	1	1			
	画学及画学実習	13	13	10	13	13	9	7	6	3
	日本画				3	3	3	3	3	3
	装飾計画				5	4	11	17	11	18
	粘土造型							3	3	3
	特別講義								1	1
工場建築	工場建築								1	1
工業簿記	工業簿記							1	1	1
体操	体操	2	2	2	2	2	2	2	2	2
計		42	42	42	42	42	42	42	42	42
	内講義	18	18	18	16	17	14	10	11	7

【図1】京都高等工芸学校図案科カリキュラム(『京都高等工芸学校一覽 自大正14年至15年』より)

吾は、武田作成のカリキュラムを長くそのまま踏襲しており、これを改訂するのは昭和4(1929)年と白井の卒業の翌年なので、白井はいわば武田カリキュラムで学んだ最後のほうの図案科生にあたる。参考に『京都高等工芸学校一覧』から、在学当時の課程をここに転記しておく【図1】。また当時「図案学及実習、図学及実習、図画学及実習」を担当していた教官の向井寛三郎は、もとは図案科の7期生であり、武田五一の厳しい製図指導に直接接し、「武田のこわさ」をのちにも家族に語ってきかせている卒業生だった¹⁹。本野、向井らによって、白井の時代にも初期の図案科の気風は伝わっていたのではないだろうか。

さて、ここまで見てきたうえでもう一度、川添の『ノート』を読み直すならば、自分で言うほど、白井は不真面目な学生ではなかったのではないかと思わせる節がある。例えば学生時代に「家具を設計」し自宅で使ったりしたのなら、それは「椅子及卓子新案」などの図案の課題の実践ともみえる。「流線型の自動車」のデザインを描いていたのも、学校では学生の模写用に海外の図案集が購入され、同時期にはル・コルビュジエに興味を抱いた本野がフランスの美術雑誌『ラムール・ド・ラルール』や関連書籍を入手するなどしていたので、こうした環境からインスピレーションを得た可能性もあるだろう²⁰。

また『京都高等工芸学校一覧』の生徒や卒業生の名簿から推し量ると、一学年の時点では白井を含め39人いた図案科の同級生のうち、課程どおりの3年間で昭和2(1927)年に卒業生として名前が確認できるのは24人。実に10人以上が落第したことになり、このなかの白井を含めた9人が翌昭和3(1928)年3月に4年間かけて卒業している。落第は望ましくはないにしろ、珍しいことではない。さらに、既に指摘されているとおり²¹、この年の春には、白井の卒業計画としてバウハウス風のポスター【図2】が雑誌『建築と社会』(第11集第5号)の「京都高等工芸学校本年度卒業計画」コーナーに掲載されている²²。図案科卒業生は39名いたが、作品が掲載されたのは9名のみ、さらにいわゆる落第生のなかでは白井とあと1名のみなので、教官からはむしろ評価されている学生だったのではないか。

余談だがこの『建築と社会』とは、大正6(1917)年に創設された関西建築協会の機関誌『関西建築協会雑誌』を前身とするもので、この時の号には京都帝国大学や神戸高等工業学校など関西の他校の卒業計画も掲載されている。これらがパースや平面図など流麗な建築図面を描いているのに対し、京都高等工芸学校の方は「アパートメントの草案」などの建築立面図もあるものの、「浴室計画模型」「陳列室の装飾」「舞台面」「絶対映画」「ポスター」などバラエティの豊かさが対比的に際立っている。

また同号には本野精吾の「建築の色彩」という論文が収録されているが、エジプト、ギリシア、ビザンティンからブルーノ・タウト、最新のル・コルビュジエのペサック集合住宅までが紹介されていて、白井も学校では教授の本野からこのように多様な建築の講義を受ける機会があったのではないかと思わせる。

さてポスターが卒業制作であるところから見ても、学生時代の白井は建築家や建築に関する情報に近い環境に身を置きながら、その方面には情熱を注ぐことは出来なかったとみえる。『京都高等工芸学校一覧 自昭和3至4年』に記された昭和3(1928)年の卒業直後の彼の就職先は、記録が間違いでなければ、「京都市染色試験所(京都市烏丸頭)」となっている²³。同年の図案科卒業生のなかには、武田時代より少ないものの、「東京市役所建築課」「石本建築事務所(東京市)」など建築関係に就職したとみられる者がおり、また2年上の大正15(1926)年の卒業生には宮内省内匠寮に入り旧朝香宮邸(現・東京都庭園美術館)の照明や家具デザインに携わる水谷正雄の名なども見つけられるのだが、白井の卒業後の進路は、まずは建築とは無関係だったようだ。だが翌年の『京都高等工芸学校一覧 自昭和4至5年』からはこの就職先の記載は消え、「京都市大宮通一條上ル 近藤浩一方」と住所のみが記されているので、一度就職したにしろ、すぐに辞めてしまったとみられる²⁴。



【図2】ポスター、京都高等工芸学校本年度卒業計画
白井成一君(『建築と社会』第11集第5号より転載)

そして昭和5(1930)年のドイツ、ハイデルベルク大学への入学書類の記録²⁵から、11月に白井は同大学への入学許可を得て、哲学科で美術史などの履修を希望したことがわかる。『ノート』や『年譜』にあるように昭和3(1928)年の卒業直後ではなく、実際には約2年の期間をおいて留学したようだ。また昭和7(1932)年の終わりには帰国の途についているので実質的な留学期間は2年以内だった。ところが折角入学したハイデルベルク大学にも白井は飽き足らないものを感じ、翌昭和6(1931)年9月にベルリン大学に移る。このベルリンの地で奇妙に京都高等工芸学校との縁が交錯するのである。

まず少し前の6月、京都帝国大学からひさびさとなる渡欧を命じられた武田五一がベルリンにやってきて、1カ月半ほど滞在し、バウハウスを見学したり、「出来る限り独逸の新らしい傾向を持って居る建築家に会った」ということで、タウト、ペルチヒ、マルゴールド、メンデルゾーン、グロピウス、ミースなどに会い、精力的にヨーロッパを視察した後、8月にアメリカにむけて発っていった²⁶。その後10月には京都高等工芸学校の直接の師である向井寛三郎がやはりベルリンに留学してくる。白井は滞欧中の日記から、ベルリンでは大学の席を暖めるというより社会主義などに関心を傾け、その仲間と過ごす時間が増えていた様子がみえるが、こうした日々のなかでも何度か向井とは会ったようである²⁷。向井の方はベルリン大学内にある外国人研修所でドイツ語を学び、ついでライマン工芸学校商業図案科で平面図案を、さらに11月から翌昭和7(1932)年2月までは工科大学建築学科で建築を学び、4月から7月までは工科大学教授で建築家ペルチヒのアトリエで修業するなど、極めて真面目に図案と建築を学んでいる。ペルチヒの事務所での修行は、この建築家に先に会った恩師・武田の紹介によるものだったので、留学を巡って武田と向井の間では交流があったようだ²⁸。こうしたつながりから、白井の視界にも、同じドイツの地で「建築」を学ぼうとする彼ら京都高等工芸学校の先達たちの姿や情報は入ってきていたはずなのである。この後帰国した白井は、紆余曲折を経て、昭和10(1935)年頃、義兄近藤浩一路の家の設計に携わることで、建築家への道を歩み出す。

おわりに

いままで見てきたように、白井は京都高等工芸学校の教育やそこに集った人々を通し、後に建築家となるうえでのある程度の基礎教育、あるいはそれ以上の高次な学びや刺激を得ていたのではないか。後年の白井がどうしてこの時代の詳細を語らなかったのかという理由は、本人の言葉がない以上、想像の域を出ない。まだ自分の方向性が定まらず葛藤の青春期であった、ということ以外に、開校の当初から、あるいはその後も、「構造的建築」と「美術的建築」などが対立的に論じられるなかで、日本の近代建築界が、同校の図案科での武田五一の独自の建築教育をどう評価してよいのか判断をくだしかねていたことも一因かもしれない²⁹。だが例えば建築史家の村松貞次郎はその著書『日本建築家山脈』のなかで、この武田の影響下に建築家の白井を位置付けているのである³⁰。また、武田のカリキュラムによる、「創意」を重視し、その表明手段である「図案」の技術を磨くことで、装飾から建築まで多様な創作をこなしていく当時の図案科の自在さは、後に建築から家具や照明デザイン、書籍装丁など多ジャンルの仕事をした白井の姿勢にも通じるところがある。実は『白井晟一入門』展の準備中に、我々は白井の最後の弟子・柿沼守利より、晩年の白井があるとき家具の意匠の一部を拡大し、巨大な建築物のデザインとしてみせた、という逸話をうかがったことがあるが、その自由さにもつながるように思う。さらに近代建築界において最初期に茶室研究をし、また伝達手段として建築図面の表現力に強い拘りをもっていた武田五一の美学は、松濤美術館をはじめ少なからぬ自分の建築に茶室を設け、建築図面の芸術的なまで完成度を目指した白井のそれと共鳴し合う部分もあるようにみえる。このように多様な要素や問題提起に満ちた京都高等工芸学校時代こそが、本人が肯定するにせよ否定するにせよ、紛れもなく後の異色の建築家、白井晟一を育む揺籃だったのではなかろうか。

- ¹ 浜口隆一、松村貞次郎『現代建築をつくる人々 建設組織ルポ』KK世界書院、1965年(改訂版、初版1963年)、pp.37-39
- ² 川添登『白井晟一 建築とその世界』世界文化社、1978年
- ³ 川添登「白井晟一論ノート1」『近代建築』2007年3月、pp.26-29;「白井晟一論ノート2」『近代建築』2007年4月、pp.26-30
- ⁴ 平井俊晴作成、白井彪介・白井昱磨監修、「年譜」『建築文化』(特集:白井晟一:近代との相剋の軌跡)1985年2月、pp.142-153
- ⁵ 註3前掲「白井晟一論ノート1」、pp.27-28
- ⁶ 註4前掲「年譜」、pp.142-143
- ⁷ 以下の名簿で、在学中から卒業後までの「白井成一」の名を確認できる。『京都高等工芸学校一覧 自大正13年至14年』、1924年、p.108;『京都高等工芸学校一覧 自大正14年至15年』、1925年、p.109;『京都高等工芸学校一覧 自大正15年至16年』、1926年、p.110;『京都高等工芸学校一覧 自昭和2至3年』、1927年、p.111;『京都高等工芸学校一覧 自昭和3至4年』1928年、p.164;『京都高等工芸学校一覧 自昭和4至5年』1929年、p.170、ちなみに1925年と1926年の2回にわたり、図案科第二学年として白井の名前が確認できるので、落第とはこの期間であったのだろう。
- ⁸ 武田五一については以下を参照、展覧会図録『武田五一・田辺淳吉・藤井厚二 日本を意匠した近代建築家たち』ふくやま美術館、2004年;展覧会図録『フランク・ロイド・ライトと武田五一 日本趣味と近代建築』ふくやま美術館、2007年;谷藤史彦『研究図録 評伝武田五一 茶室からアール・ヌーヴォー、スパニッシュ様式へ』ふくやま美術館、2016年、なおこれらのふくやま美術館発行の資料について、同美術館の鈴木一生氏より提供いただいた。
- ⁹ 本野精吾については以下を参照、展覧会図録『建築家 本野精吾展—モダンデザインの先駆者—』京都工芸繊維大学美術工芸史料館、2010年
- ¹⁰ 宮島久雄、「京都高等工芸学校図案科初十年の成績 一浅井忠と武田五一—」『デザイン理論』(35)、関西意匠学会 1996年、pp.71-84;「武田五一の「図案学」—京都高等工芸学校図案科史—」『研究紀要』第18号、京都大学文学部美学美術史研究室 1997年、pp.1-33;「武田五一の図案教育—京都高等工芸学校図案科史2—」『研究紀要』第19号、1998年、pp.19-56;「本野精吾の図案教育—京都高等工芸学校図案科史3—」『研究紀要』第20号、1999年、pp.1-36;「向井寛三郎の図案学」『デザイン理論』(39)、2000年、pp.85-98;『関西モダンデザイン前史』中央公論美術出版 2003年(本書は「武田五一の「図案学」」、「武田五一の図案教育」、「本野精吾の図案教育」、「向井寛三郎の図案学」を改訂所収)
- ¹¹ 註10前掲、宮島久雄「武田五一の「図案学」」、pp.3-8およびp.29
- ¹² 註10前掲、宮島久雄「武田五一の図案教育」、pp.19-22およびpp.44-45
- ¹³ 註10前掲、宮島久雄「本野精吾の図案教育」、p.26
- ¹⁴ 註10前掲、宮島久雄「武田五一の「図案学」」、pp.21-22およびp.33
- ¹⁵ 註10前掲、宮島久雄「武田五一の「図案学」」、p.12
- ¹⁶ 註10前掲、宮島久雄「武田五一の「図案学」」、pp.22-26およびpp.32-33
- ¹⁷ 註10前掲、宮島久雄「武田五一の図案教育」、p.38
- ¹⁸ 註10前掲、宮島久雄「京都高等工芸学校図案科初十年の成績」、p.84 註38
- ¹⁹ 向井正也「建築・人と作風 武田五一」『ひろば』、1986年8月号、pp.16-20、なお建築史家である著者は向井寛三郎の子息である
- ²⁰ 註10前掲、宮島久雄「本野精吾の図案教育」、pp.20-23およびp.35
- ²¹ 藤森照信『昭和住宅物語—初期モダニズムからポストモダンまで 23の住まいと建築家』新建築社、2000年、p.188 白井成一の卒業制作ポスターの存在は、ここで指摘されていたが掲載雑誌名が不明だったため、藤森氏より、卒業年の建築雑誌、とご教示をいただき調査したところ、『建築と社会』と判明した。
- ²² 『建築と社会』第11集第5号、昭和3(1928)年5月1日
- ²³ 註7前掲、『京都高等工芸学校一覧 自昭和3至4年』、p.164
- ²⁴ 註7前掲、『京都高等工芸学校一覧 自昭和4至5年』、p.170

- ²⁵ 川添登旧蔵資料中の入学申請書類の写しより。なお1931年の母校の名簿の卒業生欄には、白井の住所は「B/Unkelbach Unter Neckarst. 26. Heidelberg, Deutschland」と記されており、卒業生中に海外滞在者が少ないな
か目を引く。『京都高等工芸学校一覧 自昭和6至7年』、1931年、p.194
- ²⁶ 註8前掲、谷藤史彦『研究図録 評伝武田五一』、p.132；註10前掲、宮島久雄「向井寛三郎の図案学」、pp.90-91お
よびp.97。武田は生涯に5回ほど海外渡航しているが、ヨーロッパ巡歴はこれが最後となった。
- ²⁷ 木原天彦「ベルリンの白井晟一」『白井晟一入門』、青幻舎、2021年、p.25
- ²⁸ 註10前掲、宮島久雄「向井寛三郎の図案学」、pp.89-92およびpp.96-98
- ²⁹ 宮島は、開校当時の建築雑誌において、東京美術学校の図案科は「学科程度は非常な相違ではあるが、彼の建築
装飾史、装飾術、建築製図があるために東京美術学校に於ける図案科も建築教育の内に入れて論じて差し支へ
ない」と建築教育の場と認識されたのに対し、「京都[高等]工芸学校の図案科は建築学とは余程縁が遠いよう
に思われる」と評された事例をあげている。註10前掲、宮島久雄「武田五一の「図案学」」、p.19およびp.32；志賀重列
「我国建築教育の過去及現在」『建築雑誌』第227号、建築学会1905年10月、pp.743-756
- ³⁰ 村松貞次郎『日本建築家山脈(復刻版)』鹿島出版会、2005年、pp.87-96

川添登研究の方法的課題

木原天彦(渋谷区立松濤美術館 学芸員)

2021年に当館で開催した「白井晟一入門」展(2021年10月23日～2022年1月30日)の準備を進めているとき、筆者は川添登(1926～2015)の資料を調査した。実見したのは白井に関する部分だけで、それだけでも何冊ものスクラップブックやノート、印刷物など数多くの資料があり、1つ1つの資料を見ていくのに丸2日間を要した。この時に調査できたのは全体のうちのほんの一部だったが、展覧会終了後も継続して実見を続けてみると、実際の川添登資料は、段ボール箱60箱以上にもものぼる大量のメモや原稿の山、書類等からなっていることがわかった。この一式は現在、ご遺族の所有となっているものだ¹。

さて、白井晟一にとっての川添登は、全国的にその名が知られるようになるきっかけを作った、いわばプロデューサーであり、それ以前に良き理解者だった。よく知られているように、1953年、『新建築』の編集長となった川添は、1957年の「新建築問題」で編集部を辞すまで、評論記事の充実による挑発的な誌面づくりを行い、その中で白井晟一の「秋ノ宮村役場」や「松井田町役場」などの建築作品、およびアンビルトの計画案「原爆堂計画」などを立て続けに取り上げた。白井晟一は建築界での有力な人脈を持たず、それゆえに日の目を浴びることも少なかったが、川添はその才能にいち早く気づき、彼の作品と思想を同時代建築界への痛烈なカウンターにまで高めていったのである。更に川添は、1978年に出された白井晟一の伝記『白井晟一 建築とその世界』(世界文化社)をはじめとして、繰り返し白井晟一の人物像を描写し、語ってきた。川添によれば、『新建築』時代に書いた白井晟一評の多くは、掲載前に「自分が書いた原稿を本人の前で読みあげた」というし、『白井晟一 建築とその世界』には白井の毛筆による緒言が添えられているから、彼の白井言説は作家公認のものだったといえるだろう²。白井の作品と川添の言説は相互に影響しあい、強力で一体的なイメージを生産し続けた。

こうして、白井晟一の価値評価における川添登の重要性を改めて確認したとき、川添登の思想的な特異性を明らかにしていく作業の必要性が自然と浮上してきた。川添は戦後建築批評のパイオニアと言える人物ではあるのだが、以下で触れるように、同時に建築の領域を軽々と飛び越えて、文明論にまで至ってしまう関心と視野の広さがある。それ故に、白井晟一をはじめ建築家にとっての川添登について考察を行うだけでは、そもそも川添が建築に携わることを通じて何を成し遂げたかったのかが明らかにならないのである。

本稿で行いたいことは、今後、川添登という人物の思想的な遍歴を描くために、越えなければならないいくつかの問題点とそれを解決するための方法論とを列挙することである。それぞれの項目に挙げた問題点は網羅的にも排他的でもない。その意味で本稿は未だ川添登研究より手前の、いわば準備段階となる道具立ての確認であり、「方法的課題」という表題はこの理由から選択されている。

川添登とは何者か

川添登とは何者か。1926年2月23日に東京・駒込で生まれ、2015年7月9日に没したこの人物の肩書を改めて確認する時、この問いに答える難しさに我々は直面する。以下、『日本美術年鑑』の物故者記事をもとに幾つかの補足を交えながら、彼の経歴と肩書きを確認してみよう。

1953年に早稲田大学理工学部建築学科を卒業してすぐ、『新建築』の編集長となり、その後57年に独立し建築評論家、都市評論家、文明評論家として活動。1960年の世界デザイン会議の実行委員であり、この会議に合わせて結成されたメタボリズム・グループのコアメンバー。未来学会(68年)・日本展示学会(82年)・道具学会(96年)など既存の学問領域に囚われない新しい学会の設立者の一人であり、特に72年の日本生活学会の立ち上げにあたっては、初代会長に今和次郎を立て、自身は理事長に就任するなど、中枢において奔走したことが特筆される。また、1970年大阪万博のテーマ展示サブ・プロデューサー(空中館)、つくば万博政府出展総括プロデューサー(81年)、学術シンクタンク・CDI(コミュニケーション・デザイン・インスティテュート)の所長(70年)、郡山女子大学人間生活学科(87年～99年)の教授も務めるなど、川添は実に数多くの肩書きを、30歳頃の若手時代から晩年まで、目

まぐるしく乗り継いできた³。

肩書きからだけでも窺い知れる多岐にわたる活動のみならず、一つ一つが及ぼした影響の大きさも相まって、川添登という人物像の総体を把握することは極めて困難な作業である。しかし、例えば森美術館で行われ、研究者以外にも広い関心と呼んだ「メタボリズムの未来都市展」(2012年)を顕著な例として、川添に関する論述や言及、顕彰がこれまで数多く行われ、数々の研究者や建築家、あるいは芸術家にとっての関心の的となってきたこともまた事実だ⁴。すなわち、川添の仕事はさまざまな論者に参照され、大きな影響を与え続けている反面、一人の評論家・思想家としての川添という個人の総体を描き出す仕事は、未だ着手されてはいないのである。

課題1:総合化と文飾化

そもそも、川添登を一個人として論じる意義すら、必ずしも自明ではない。それぞれの仕事を別個のものと考え、その成果について論じることもまた、可能はずではないか。

しかし、まずは各々の仕事は連続している、あるいは別個である、と短絡的に分類すること自体に対して注意を向ける必要がある。当然ながら物事には連続面と切断面があり、そのどちらを強調して語るかの判断は、研究者自身の設けた分析枠組みに依拠している。仮に連続面を重視する立場に立てば、川添登本人の残した数多くの文章を読み解き、思想的な因果関係を著作どうしのあいだに読み取ることは多くの場合で可能だろう。

たとえば建築家の吉松秀樹は、『メタボリズム 1960年代—日本のアヴァンギャルド』の中で、川添が『新建築』誌上で仕掛けた「伝統論争」から、建築運動「メタボリズム」へと至る筋道を措定する⁵。吉松が指摘するのは主に2点で、①「建築家と並びそして飛び越えた存在のオピニオン・リーダーとしての自負」が両運動を牽引する川添を突き動かす動機であった点、そして②「市民像や家族像といった人間像を建築家の意識に代入した伝統論争は、建築に生命の原理を持たせようとする意識をうみだした」点である⁶。このように局所的ではあれ、すでに先行研究は川添の思想的連続性に注目し、記述する試みを行ってきたのである⁷。

一方で、川添の思想に切断面が存在することもまた、否定できない事実である。前出の吉松の主張のうち、②に注目しよう。吉松は「伝統論争」の時点で川添の主張に「デザインや都市や建築を維持するのは人間の生命力である」とする考えが内在していることを見出し、生命の原理(細胞分裂と新陳代謝による成長)を建築に適用するメタボリズムとのあいだの関連性を明証しようとする⁸。しかし、川添自身がメタボリズム運動の最中、かつて伝統論争の主役の一人として取り上げた丹下健三の《広島平和記念資料館本館》(旧広島平和会館原爆記念陳列館、1952年)を論じたとき、彼の言葉を引きながら「伝統は、眼に見えない精神の中にあるのではなく形にある」と述べた事実は、吉松の議論に必ずしもそぐわない⁹。なぜなら、そこにあるのは永久に変わることのない固定化した「形」、すなわちモニュメントとしての建築の在り方にほかならないからである。恒久的なモニュメントに現れた「伝統」を論じる一方で、メタボリズムにおいて川添が述べることは、建築や都市の各ユニットが新陳代謝を行うこと、その新陳代謝の中での同一性を維持する核として、日本文化の生み出した原型、すなわち「伝統」の存在を再解釈することであり、この両者における「伝統」の位相には少なからぬ落差がある¹⁰。更には、人間の生命力によって建築を「維持」すること(この際の「人間」とは、「市民」や「家族」、すなわち建築の使用者である)と、メタボリズムのように設計プログラムの中に生命の原理を取り入れようとする建築家の論理との間の差異も見落とすことはできない。

やはり、思想的な連続性を論じるためには、どこかに必ず断絶(テーマ間の論旨の矛盾やずれ)があることも確認しておかなければならない。伝統論争における議論がメタボリズムへとスムーズに展開していったかのような素朴な議論には論理的な困難があるだけでなく、伝統論争とメタボリズム、双方の潜在的な可能性を著しく矮小化してしまうおそれすらも孕んでいる。

とはいえ、伝統論とメタボリズムの素朴な連続を論じてしまうことについて、研究者の側ばかりに責任を帰すこともまた不毛だろう。というのも、吉松自身も指摘するように、この連続性を主張していたのは、ほかでもない川添自身だったからである¹¹。研究者によって論じられてきた川添の思想的展開については、実は川添自身がすでに語っている場合が少なくない。すなわち、川添自身の自分語りの過剰さ、これが第2の課題である。

課題2：自分語りの過剰さ

川添登はそのキャリアの中で頻繁に仕事の総括を行ってきた。たとえば1956年、伝統論争を展開していた最中に『建築雑誌』の座談会で語った、『新建築』の編集意図に関する発言に注目しよう¹²。これによると、以前は雑誌が建築家に掲載を「お願いに行く」ことが多かったところ、川添は雑誌としての権威を高めるために、新たに編集部主導で作家論を講じる誌面づくりを行ったと主張している。更に、今後は作家論による誌面の権威化と並行し、作品の公募や関西への通信員の配置による「国民的な盤」と、英文による国際版の発行を通した「国際的地盤」を築くことを展望する。川添は、自分たち編集部の生み出す言説が権力を持ち得るということについて極めて自覚的だったのみならず、作品公募によって『新建築』を中心とした全国各地の情報のプラットフォームを形成し、国際版を通して世界の建築界での評価を高めようと目論んだ。秋田や群馬を中心に地方での作例が知られていた白井晟一が、「民衆の作家」として取り上げられたのも、『新建築』の編集方針と親和性があったからである。そしてこのような認識があったからこそ、川添は自身の活動の自己解釈と物語化を積極的に推し進めることを厭わなかった。例えば、大高正人の傘寿を記念して出版された『メタボリズムとメタボリストたち』(2005年、美術出版社)や、生涯住み続けた豊島区に位置する巣鴨地蔵通り商店街で、師である建築学者・今和次郎の考現学を応用したワールドワークの記録『おばあちゃん原宿—巣鴨とげぬき地蔵の考現学』(編著、1989年、平凡社)など、後年さまざまな著作で繰り返し自らの歩んできた道を辿り直し、隠に陽に語り続ける様には、その片鱗があらわれているとみるべきだろう。

こうした自分語り研究を進める上で障壁となるのは、論者が必然的に本人による意図に覆われたテキスト空間の中に分け入ってゆかなければならないということに尽きる。川添がいみじくも表明するように、彼の評論には「仕掛け」と「戦略」があった¹³。つまりは言外の意図がテキストには隠されている。そして川添の場合、「戦略」を暴露するテキストとしての「自分語り」、そのものにすら戦略性が含まれている可能性にも、論者はなおのこと意識的でなければならないのである。すべての言葉の背後にある戦略性を注意深く析出しながら読まないかぎり、いつまでも川添の意図を乗り越えることはできない¹⁴。前述したように、川添の評論にはただ一つの論理展開があるのではなく、必ず矛盾する要素を孕んでいる。しかし川添の「自分語り」だけを信用すると、一点の曇りもない展開があたかも存在するかのように錯覚することになってしまうのだ。その意味で重視すべきは、やはり川添の自分語りをうち破る「矛盾」の側にあるだろう。

課題3：思想性と実証性

第3の課題として、川添の思想と論理実証性の関係についても考えておきたい。川添の関心は先にも述べたように極めて広く、専門知の領域をいくつも軽々と横断してゆくようなところがある。しかしまさにこの傾向が、現在の成熟した各学問分野の只中における、一種の分断を生じさせていることも事実だろう。川添自身は領域横断的な論者であるのに対して、川添登研究の射程は、川添が対象とするテーマの個別具体性や実証性を重んじる正当な意味での研究者であるほどに狭くならざるをえないからである。

しかし、川添の、とりわけ思想に焦点を当てるには、川添の議論の実証的な側面と、個別の対象をもとにした川添独自の解釈の側面とをひとまずは分けて考えてみなければならない。建築や都市に関する同時代的な情報を数多く含んでいる川添の記述が実証性を重視したものであることは当然としても、専門知の越境そのものが持つ機能や、それぞれの知識の連合によって川添が実現しようとしたものの内実を問うこと自体が、思想を問うことに他ならない。そのためには、他の論者が川添と同じテーマを共有し、個別具体的な事例を同じく素材として用いながら、別の解釈を行った可能性を調査の上で明らかにしなければならない。彼らの解釈と川添のそれとの差異はどこか、川添の思想的な特異性を明らかにするためには、このような視点に立った思想の比較分析の手法が欠かせない。

川添の評論が学問領域の越境を伴うものであったという点については、今和次郎の考案した独創的な新学問・考現学に強く感化されてきたということ、そして自ら述べるように川添自身がかつて共産党員であり、「建築とマルクス」(『思想』1967年9月号)と題された論考が示すように、マルクス主義の影響を受け、歴史・社会のグランドセ

オリーの解明に意欲を示したことが要因として考えられる¹⁵。

しかし同時に、越境的な知のありかたを許容し、歓迎するような状況が、とりわけ1960年代以降、川添の周囲に広がっていたという事実にも目を向けておかなければならない。それはいわば、戦後における学問の再編成の動きの中に、川添の活動を位置付けるという視座である。

たとえば、万博の準備段階において自主的に結成された「日本未来学会」は、梅棹忠夫(文化人類学)・小松左京(小説家)・加藤秀俊(社会学)・林雄二郎(経済企画庁官僚)・川添登(建築評論)の5名が集まった「未来学研究会」を母体になっているが、このうち梅棹と加藤は京都大学人文科学研究所に勤務した経験を持つ。霊長類研究の今西錦司やフランス百科全書派の研究などを行った桑原武夫を中心とした「人文研」は、いわゆる共同研究と呼ばれる学際性を大きな特徴とするが、以下に引用する加藤の回想はこの共同研究の様子を活写している。

そして、かんがえてみると、明治維新論から米騒動、サルやチンパンジーの研究から文学理論、離婚の調査から伝統芸術論—全く雑多なテーマについて、雑多な勉強をした。いろんな「専門家」から、多様なことを教えられた。わたしは、自分の「専攻」が「社会学」であるのだ、と思いこんでいたのだが、「この道一筋」的な生きかたは、だんだんと心の中から消えてゆき、そのかわりに、世界というものを見る多様な視角に魅せられる人間になっていたのである¹⁶。

梅棹忠夫が未来学を「一種の総合科学」と形容したことからも明らかなように、このような多分野の議論を集約して一つの大きな問題に取り組もうとする姿勢は、未来学研究会の活動にも着実に流れ込み、川添の思想とも共鳴したのである¹⁷。

課題4:著作量と編纂作業

最後に、学際的に幅広い分野への言及を行った川添登の、評論活動全体の膨大さそのものが抱える困難についても考えたい。

著作の編纂に先鞭をつけた重要な仕事である『川添登 著作目録』によれば、川添の単著は48冊、共編著は58冊、監修35冊、監訳4冊、雑誌や新聞などの掲載論文に至っては実に1602本を数える¹⁸。さらには書評59点、事典執筆項目63点、調査報告書66点、講演65点、対談75点、座談127点、談話57点、シンポジウム52点、そして少年時代の詩が2点、存在する。講演、対談、座談などはその記録が文章化され、出版されたものに限っているため、実際にはより数が増えることになるだろう。このような膨大な参照項をひもとき関連付けること自体に、まずは困難と労力が伴う。それだけではなく、当初雑誌に連載されたものが、再録や再編によって単行本化しているケースがきわめて多いということも見逃せない。再録の過程においては多くの場合、テキストの取捨選択や改稿が行われているが、思想を問題にする場合には、初出にのみ当たれば事足りるというわけにはいかない。むしろ、テキストの絶えざる編集こそが、雑誌編集者から出発した川添にとって、思想の一種の表現になっていると考えるべきである。単発の読み物として完結させやすい雑誌連載から、それを集成して一個のコンセプトを持つ書籍へと移し替える際には、当然ながらそのテキストが読まれる読者層が変わり、時代の趨勢が変わり、論集の場合には前後に配置される他の論文との相互関係も変わる。そして何よりも、川添自身の思考の論理構造自体が変わっている可能性が大いにある。自分自身のテキストを取り巻く状況の変化にさらされた先に、いかなる変更が生じたのか、いかなるテキストが除外され、いかに順序が整えられたのかが問われなければならない。歴史社会学者・佐藤健二が述べるように、「資料空間そのものを脱構築するモメントを含まない研究実践や出版活動は、恐らく人びとを無自覚なまま、既存の読書空間のなかに閉じこめていくにちがいない」¹⁹。川添によって編集された何冊もの書籍はつまり、その時点における川添自身による言説の脱構築であり、再構築である。その構造を批判的に読み解くことが、自分語りの「矛盾」の洗い出しと並ぶ、川添の意図の外側へと歩み出す作業となるだろう。

まとめ—文明論の分析に向けて

以上、大きく4つの課題から手短かに川添登研究の方向性を考察してきた。簡単にまとめれば、①思想の全てが連続していると早計せず、議論間の連続性と矛盾点の双方を注意深く析出すること。②川添の戦略性を考慮に入れること、③思想性と実証性を切り離して評価すること。その際には他者との比較を重視すること、④膨大な著作の分析については、とりわけテキストの再編成に目を向けること、となる。本稿での目的は川添研究における既存の問題点の洗い出しであったために、研究の足場とするべき、いわゆる分析の枠組みについては提示することができなかった。しかしすでにこれまで見てきたように、川添が自らの思想体系の連続性を強調し、自分語りを行い、時に専門知の領域を軽々と飛び越えながら膨大な著作を書き繋いだ熱意が、ひとえに、日本の伝統から未来へと向かう文明論の構築に向けられていたことは興味深い。今日では蛮勇とも取られかねないこの文明論への言及はしかし、丹下健三や白井晟一、メタボリスト、そしてなによりも京都大学人文研究所の周辺で当時、少なからず行われていたことでもあった。それゆえに、戦後日本において文明論を語る制作者・評論家たちの中での川添登の役割を明らかにすることは、川添登研究が依拠する分析の枠組みとして極めて有効だろう。川添による、知の枠組みとしての文明論が誰によって望まれ、消費され、影響を及ぼしたのか。彼の文明論的言説をめぐる社会的布置を分析することこそが、部分的な関心に閉塞しがちだったこれまでの川添研究を超えることにもつながるはずだ。

¹ 白井晟一展にあたっての資料調査では、当時、国立近現代建築資料館の研究補佐員であった加藤直子氏・寺内朋子氏の助けを得た。ここに記して感謝したい。

² 川添登「伝統論やメタボリズムの周辺」『建築雑誌』（Vol.110、No.1376）、日本建築学会、1995年8月、40頁。及び、川添登『白井晟一 建築とその世界』、世界文化社、7-10頁。

³ 「川添登 日本美術年鑑所載物故者記事」（東京文化財研究所）<https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/809096.html>、最終アクセス2024年1月30日。なお、日本生活学会では92・93年度に会長、日本展示学会では92～02年まで2代目会長を務めている。

⁴ その他、たとえば、布野修司『戦後建築論ノート』（1981年、相模書房）、八束はじめ＋吉松秀樹『メタボリズム—1960年代、日本の建築アヴァンギャルド』（INAX出版、1997年）をはじめとする一連の戦後建築史研究、小林多寿子「川添登と生活学会の誕生」、及び、面矢（福島）慎介「川添先生と道具—生活学」（いずれも『生活学論叢』28号、2015年、日本生活学会）など生活学会の設立をめぐる談話などが挙げられる。すなわち、川添の業績への言及の多くは、戦後建築史界隈、及び日本生活学会を中心に行われてきた。

⁵ 「伝統論争」は1955年頃から「新建築」を中心にジャーナリズム上での議論が行われた、現代建築と伝統の関係性を問うもの。一方の「メタボリズム」は1960年に川添や菊竹清訓らにより結成され、「新陳代謝する都市」を目指した建築運動を指す。吉松秀樹「伝統論争とメタボリズム 川添登の戦略」『メタボリズム—1960年代、日本の建築アヴァンギャルド』INAX出版、1997年、46-51頁。

⁶ 前掲書5、47頁及び50頁。

⁷ また、概括的な把握としては、川添の著作目録を編集した寺出浩司が「すべての関心が持続されながら、その宇宙の中に新たな関心がどんどん組み込まれていく」ありさまに、川添登という個性の特異な発露を指摘している。寺出浩司「解題」『川添登著作目録』1997年、ドメス出版、221頁。

⁸ 前掲書5、46頁。

⁹ 川添登「現実と創造 丹下健三=1946-58」『建築Ⅰ 川添登評論集』、産業能率短期大学出版部、1976年、116頁。

¹⁰ 川添登「機能主義とメタボリズム」『建築Ⅴ 川添登評論集』、産業能率短期大学出版部、1976年、164頁。なお、永久不変のモニュメントとメタボリズムの論理の接続には、丹下とともに伝統論争のもう一人の主役であった白井晟一の代表作「原爆堂計画」について論じた、別の伝統論が参照される必要がある。川添はそこで「文明が人間の幸福のためにこそ存在するのだと強く信じていた人びとが、文明を築く過程でたえまない闘いを行い、文明によって不幸にされた人びとが、それに抵抗し、文明を人びとの幸福のために用いようとする長い努力のうえになされてきた」と述べ、「原爆堂」が文明の集会的な記憶＝モニュメントとして、人間の「長い努力」という介

入を要請する造形物であることを仄めかしている。(前掲書9、223頁。)

- ¹¹ 前掲書5、47頁。
- ¹² 市浦健・稲垣栄三・川添登他「建築ジャーナリズムの動きをたどる：関係誌20年の歩み（創立70周年記念特集）」『建築雑誌』833号、1956年4月、日本建築学会、59－78頁。
- ¹³ 川添登「仕掛けとしての伝統論争 戦略としてのスター主義」『建築ジャーナル』No.863、1995年5月、21－28頁。
- ¹⁴ たとえば、南後由和「丹下健三の建築と有名性 1950－60年代の専門誌・一般紙誌の分析を通して」（『年報社会学論集』20号、2007年、143－154頁）では、「『新建築』の戦略」と題して川添登の編集方針を論じており、「川添登は、戦略的に「作家としての建築家像」を打ち出すことを企図し、その先頭に丹下を掲げた」と述べている。同様の論旨から筆者も「川添登の白井晟一論とその背景—1950年代における建築家の主体性の確立」（『白井晟一入門』2021年、青幻舎、220－223頁）を書いたことがある。しかしこうした議論のすべては、川添自身によってすでに明らかにされていた「戦略」に則り、進められた論理展開にほかならない。
- ¹⁵ 「川添登オーラル・ヒストリー 第1回」、中谷礼仁、鷺田めるろによるインタビュー、2009年3月24日、日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ(https://oralarthistory.org/archives/interviews/kawazoe_noboru_01/)、最終アクセス2024年2月29日。
- ¹⁶ 加藤秀俊『わが師 わが友 ある同時代史』中央公論社、1982年、93頁。
- ¹⁷ 林雄二郎・小松左京・加藤秀俊・梅棹忠夫「どうなる・どうする 未来学誕生」『梅棹忠夫の「人類の未来」』、勉誠出版、2012年、109頁（初出：『放送朝日』1月号、第152号、朝日放送、1967年2月、9－27頁）。
- ¹⁸ 真島俊一、寺出浩司、佐藤健二編『川添登 著作目録1941・5～1996・12』1996年、ドメス出版
- ¹⁹ 佐藤健二「第一章 テキスト空間の再編成—『柳田国男全集』の試み」『柳田国男の歴史社会学 続・読書空間の近代』2015年、せりか書房、37頁。

